

川柳の雑誌

麻生路郎☆主宰



二月号

900000

No. 405

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

3月本社句会

予 小 先
想 心 代
兼題
「カササギ」

本社二月句会

ご出席倍増にご協力ください。

日時 二月七日(火) 午後六時

場所 大阪観光ホテル ⑤三五〇八番

市電道頓堀電停東へすぐ

(日本橋北詰東入る)

兼題 「三味線」 (三三) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時出句〆切厳守)

「山 彦」 (三三) 清水白柳選

「平 和」 (三三) 丸尾湖花選

「尻込み」 (三三) 長谷川三司選

席題 三 題(当日発表)

柳話 中島生々庵

呈賞 各題天位・各路郎選天位に不朽洞賞カップ

会費 百円

幹事 紫杏・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸祐・狂二

・与呂志・白水・木堂・すゑむ・薫風子・水断

・柳吉子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(〆切二月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・住吉 六〇八一

日本盛酒坊

和やかに ます一杯



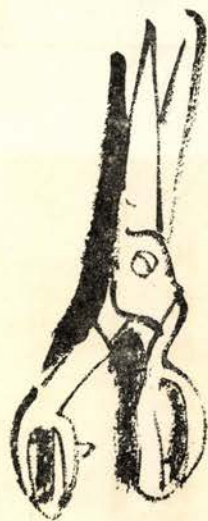
灘の清酒
ニホンサカリ

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

麻 生 路 郎

この辺のボスで表札出していず
 売春法せせら笑ったつつもたせ
 ずるずるずると補助罪となり
 やくざ稼業大学出した子がにが手
 女ずき課長にならんじまいなり
 花活けてくれるをモーションだと解し
 ロマンスグレーみたいと少女におちよられ
 金の要る理事長だけをあてがわれ
 非番ですと云うはズボンに下駄をはき
 科学より愛に溺れて死なんかな



川柳雑誌二月号目次

★柳樽室	一路集	各地柳壇	金泥集	近作柳樽	同舟近詠	川柳塔	新春川柳大会	褒似	勤労の句を望む	句評に寄せて	絵と川柳で表現する歴史	輝やく巨歩	吉川英治氏と川柳	★現代柳人録	句評リレー	雑感雑話	羽田を発って	二人一組丹下左膳罷り通る	「日本」研究への序章	選句あれこれ	名句と難句	不朽洞句帖				
★柳樽室	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」	「値上り」	「愛称」	「足音」				
(46)	(37)	(36)	(39)	(41)	(40)	(20)	(17)	(6)	(33)	(22)	(18)	(18)	(20)	(26)	(28)	(40)	(19)	(14)	(18)	(30)	(25)	(12)	(16)	(11)	(4)	(3)



川柳

名句と 難句

麻生路郎

〔一一六〕

順番に鼻をみているうちに着き

(古方)

小説や戯曲にも、鼻をテーマにしたものがかなりある。ゴーゴリの「鼻」や、シラ

ノ・ド・ペルジュラックの鼻などはその尤なるものであろう。

鼻にはその人その人による個性があらわれるものだ。それを飽かずながめて想像をたくましくしているうちに目的地に着いたというのである。なんの奇もない淡々たる表現ではあるが捨て難い句だ。

〔一一七〕

一茶 藤村 そしてリンゴを食べながら

(六葉)

この句は、この句の主人公の静かな生活をありのままに叙しただけであるが、しか

も何んと云うことなしにひきつけられる句だ。淡い味のリンゴを食べながら、俳人一

茶にしんきうし、詩人藤村を読み耽けるところに主人公の性格がにじみ出て来るからであらう。

一茶は本名を小林信之、通称を弥太郎と云い西暦一七六三年に生まれ一八二七年に亡くなった。信州柏原で農を業とした。八才から継母に育てられ、継子根性から句が生れている。諸国を漂遊し、異母弟と長いこと遺産を争った。五十二才で初めて妻帯した。そして郷里に落着いて俳諧を楽しんだ。セムシだったのでインフエリオリティコンプレックスを持っていて友達というものがなかった。

われと来て遊べよ親のない雀の句があるように、自然や動物が友だった。

た。

著作としては七番日記・おらが春・一茶句集などがある。島崎藤村は詩人であり、作家である。本名は春樹と云った。一八七

二年に木曾馬籠の旧家に生れ、一九四三年に水眠した。北村透谷の文字に惹かれ「文学界」創刊に参加して新体詩を作り、一八

九七年に若菜集をはじめ一葉集、夏草、落梅集の四詩集を出し、日本文学に浪漫主義の一時期を劃したものである。その後、小諸

義塾に赴任、散文を志して「千曲川のスケッチ」を習作、たゆまぬ人間凝視のうちに、小説「破戒」を書き、文壇を衝撃、自

然主義の代表作家となり、私小説的傾向を辿り「春」「家」「新生」「嵐」の佳作を生み、さらに畢生の大作「夜明け前」、未完絶筆「東方の門」を残して逝ったのであ

った。

〔一一八〕

御清潔でいらっしゃいますとおちよくられ

(七面山)

新聞記者に對して、「皇太子殿下は御清潔でいらっしゃいます」という美智子さんの言葉が一時女性の間で流行した。それはみだらな心の持主でないこと、性的に純潔なものではない。

なことを意味していたが、この句は、女から云い寄られても応じなかったので、ご清潔でいらっしゃいますのネ、とおちよくら

れたと云うのである。ネライの面白さがこの句のいのちだ。

〔一一九〕
少々は飲めと言う医者探してる

(圭井堂)

「だいぶお元気で」

「まだ飲めんのでダメですよ」

「そうですかネ。少々はいいでしょ」

「それが、うちの医者は飲めとバわんののでネ」

「あのお医者さんはクリスチャンですからネ」

こんな会話が交わされるほど病人もよくなっている。そんな患者が、

「少々はいいですよ。私がついていきますから」

と云う医者をひそかに物色していることを詠んだもの、酒好きの患者心理を巧みにとらえている。

〔一二〇〕
七五三よくぞうちの子風邪引いた

(花村)

所得が倍増になればともかく、今のサラリーマン生活では、七五三もクソもあったものではない。

「あんだ、そんなこと云ったって、お向いら云い寄られても応じなかったので、ご清潔でいらっしゃいますのネ、とおちよくら

ありませんか。」

「他所はよそだよ。親の見栄はよそうや」

「それじゃ、子どもがかわいそうよ。わたしの着物を質に入れても、着着をつくってやるわ」

「バカだね、君は……」

「どうせバカですよ」

と夫婦けんかをせんばかりの翌日から子どもが風邪をひいて、宮詣りどころでなくなつたのである。

この句「よくぞうちの子」の「よくぞ」が、実によく効いている。

七五三というのはこどもに関する儀式で三才と五才の男の子と、三才と七才の女の子が、その年の十一月十五日を祝日として、新しい衣服を着飾って、氏神に参詣し、神社でお祓いをして神酒を飲むのである。この日に各神社では三才、五才、七才のこどもが沢山集まるので、七五三といつたが、現在では三才の男女の祝は略することがある。

この儀式は古くは男女三才になると、髪置きのお祝い、生髪または深髪のお儀を行い、身分の上下をとわず頂髪を置く儀式を厳重にしたものである。そして男の子が五才になると袴着の祝を、女の子が五才になると帯解を行ったのであるが、近年はこれらの儀式の内容は忘れられている。

〔一二一〕

七五三値踏みする目がかち合つて

(弘道)

七五三の祝の晴着は、着ている本人よりも、親の見栄で、随分と金をかけるのであるから、氏神へお詣りする道すがら、うちの子の衣装は決して、よその子にひけをとるようなことはないという、その親の自負から、目を光らしていることを詠んだものである。

〔一二二〕

大ボスと云われた親父リュウマチ

ス

(摩太郎)

政治路線だ。赤字鉄道だというけど、うちの親父のおかげで、どれだけみんなが助かっているか判らないのに、大ボスだ、大ボスだと悪口をきかれたんでは親父もかわいそうだ。それにリュウマチで寝込んでからは誰一人寄りつかないの、親父も淋しいだろうと云う句だ。ボスの末路を巧くつかんでいる。

〔一二三〕

ここは阿呆になつてと斗志更にな

し

(一傘)

もう、停年も近いし、バタバタして、退職金を飛ばしては、アブ蜂とらずになつてしまふ。ここところは阿呆になつて、煮え切らないのである。停年が近いと弱

い、妻子があると弱い。それが凡人の情だと云えよう。

〔一二四〕

一人一室を子供に言い出され

(没食子)

そろそろこどもが、こどもでなくなつてゆく。それは楽しいことでもあるが、怖ろしいこともある。「お父さん、ボクは成人式もすんだんだしボク一人だけの部屋が欲しいな。」

「どうして？」

「弟や姉さんと一緒じゃ、勉強がしにくいんだもの。」

「それも、そうだが、お前に一室あてがつたら、姉さんだって欲しがらるだろう。」

「ボクよりも姉さんの方が欲しがってるんだ。」

「どうして？」

「姉さんは、ボーイフレンドが来るし、ブロマイドかなんかで、自分の部屋らしく飾りたいんだとき。」

時代の推移は斯んなこどもの要求も、アタマごなしに、叱りも出来ない。

「まあ、おっ母さんとも相談しとくよ」

と、一時的には撃退しておく

が親父たるもの今のサラリーでは頭痛のタネか。

〔一二五〕

効きすぎたかと両親の瞳が出遣い

(一傘)

あまりにもドライなこどもに、二タ親として黙視することが出来ず、その将来を案じて、代わるがわる小言を云つた。それは小言と云うよりも、二タ親の泣き言であり我が子への願望であつたので、さすがにドライなこどももシェーンとなつたのである。

「判つたら、あつちへ行きなさい」

と云つた男親の瞳と、女親の瞳が思わずカチ合つたのである。小言がすぎて自覚でもされたらという、同じ思いが明せずして火花となつたのかも知れない。

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ

近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急 運転
座席指定 特急券
求めは 二乗の5日前から

近畿日本鉄道



豊中市 戸田 古方

さからわず行けるとこまで行かんかな
むかしとった杵柄ともいわず

おのおのの立場だまってる

大阪市 市場 没食子

年の瀬に拘摸もボンヤリしてられず
ピンハネがばれて彼女にののしられ
教の子が高いかそうか買わんとけ

西宮市 若本 多久志

ボーナスを渡す訓示へ胸を張り

税吏の紹介会うだけは会うてやり

大阪市 正本 水客

霧の深さへ赤い手袋ふってみる

二人っきりにしといてという強気

気楽なのが取柄やと惚れている

大阪市 丸尾 潮花

角帯で世話をやいてる事始め

兵庫県 小西 無鬼

見本食の前へ淋しい気で立つて

あそこにも額に眼鏡置く男

議員ちう辛さ真夏も上衣着る

もうこれでお布施になった鐘が止む

大阪市 西 いわを

御指示通りに従いますと低姿勢

飲み過ぎをしなきゃよいのと云う妻の

正月の企画破って一人旅

岡山市 武部 香林

淡々と座食する身へ置炬燵

では紹介しようと一枚梳きの名刺

肩怒らせて見たいポケットのナイフ

大阪市 北川 春栄

一人子の卵割るにも世話がやけ

元旦の乾布摩擦は念を入れ

冬の高野山参拝

高野山雪の深さを尺で云い

千年の杉へ人間小さすぎ

大阪市 須崎 豆秋

十二月一万円札がクシヤになり

十二月電車やバスを待ち切れず

ホノルル市 羽佐 間柳葉

横槍を入れる積りは飲んで来る

利用価値なくなりや飲めと言わぬなり

几帳面過ぎて愛情薄くなり

堺市 吉田 圭井堂

助言無用の笠を被って釣り損ね

交通マヒ利口な順からあるいてる

ガタビシの家へ電化を揃えとは

自家用が不便なものと気がついた

山口県 国弘 半休

狂犬にされて番犬気楽に居

コスモスの腰は隣りへ折れて咲き

防府市 長野 井蛙

誘惑に打ち勝つ女の太い指

無駄口のようにには挨拶まとまらず

岡山県 直原 七面山

恋を得て田舎教師が嫌になり

狐銃をはなして医者聴診器

ガムのように——噛んで味わいたき女

父さんは耳学問で世を終り

積木など見向きもしない育ちよう

冬空へしがみついている柿一つ

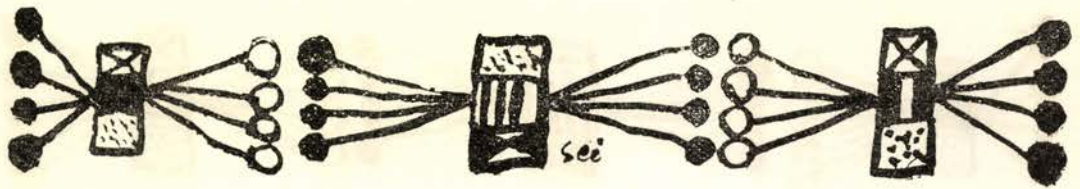
鳥取市 河村 日満

サーピスの悪さがいでゆまでくさし

袋田の滝にて

滝しぶき眼下はゴミの山であり

待つながき塙の小屋まで覗き込み



豊中市 足立春雄

そのかみのロマンチズムに未だ老いず

終電車善と悪とが同居する

肌寒し看護婦さんのストを見る

このわたが咽につまって老を知る

倉敷市 木村千容

年の瀬を小さい夢を抱いてこし

海千も山千もなし年の暮れ

加賀市 野村味平

二毛作大根などと見くびられ

嫁さんを貰うのんかと娘はなじり

貫一に扮して校内顔が売れ

大阪市 木村水堂

筋金がないので議長に選ばれる

責任のない雑音は派手になり

女房にやりこめられる十二月

高槻市 福田丁路

男女同権守る夫婦のすさまじく

有給休暇とかで魚釣る人もあり

大阪市 真鍋一瓢

おとなしい仲居身の上また聞かれ

二杯目は水さえ味の代るもの

十二月儲けない身のひまなこと

大阪市 後藤梅志

本当の文化人に国境はないようだ

鉦をチョンと押して九階へ来た

与太をいいながら電気計算器

年とつてきて驚の眼が恐くなり

稼がぬ身デパートへ来て気おされる

米子市 小西雄々

初風呂の窓には寒い牡丹雪

遭難へ親を泣かせる雪やまず

休職の間に株の研究し

大阪市 山川阿茶

天才かすれすれらしいと云う気もし

朝風呂の帰り肴を買うて去に

大阪市 金井文秋

初めだけ全集物のよく汚れ

とれるもの取らな損やと労組の

暖冬に売り残さない値を変える

加賀市 那谷光郎

お言葉に甘えりや図々しいと言われ

柿を剥く皮をたらしてババの稚気

岡山市 浜田久米雄

後輩の栄転を知る活字なり

ニコチンのこわさハンカチ見せ歩るき

岡山市 逸見灯竿

爪切れば爪は師走の音で飛び

押売りの去ぬる靴音腹を立て

上るとも下るとも株に縁なき身

出雲市 尼緑之助

酒ばかり詠んでいたずらに友こいし

しまい風呂ふと思いい出に牡丹雪

大阪市 水谷竹莊

舞扇持てばドライナ娘とみえず

十二月手品のけいこどこかいな

鳥取市 杉谷湖山

限られた予算へ地図を前に置き

叩けば響く男だったに薬飲み

京都市 大鶴喜由

組合を庄えそこねて左遷され

呑むのんなら着るわよと貰与

蚤の居心地赤ん坊の方へ去ぬ

東京都 山根白星

掌に受けるこの位ならゆける雨

ゆく末は思わじ枕据え替える

姐さんの気つぶは財布ごとわたし

奈良県 飯降白香

街角で人違いされたデイトの夜

勘定はまかしておきとチンピラが

奈良県 西辻竹青

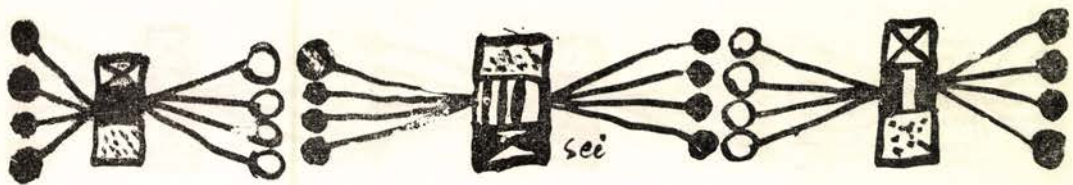
グループに金だけ取られ又落選り

夢だとか言うて不吉を書きまくる

当然の看護が夫婦の縁となり

岡山県 福島鉄児

風花雪月



相棒の財布信じた飲みっぷり

意見しておいて飲み屋を連れ歩るき

岡山市 服部十九平

凱旋のように保釈が迎えられ

またしてもスタイリストが風邪をひき

新調の靴いたわしき事故現場

尼崎市 長谷川三司

頑固さのヤイト嫌いで通すなり

孫の七五三にて

振り返る向うも子連れ七五三

西宮市 若林草右

オールナイトそれビタミンのホルモンの

ロンドンの霧もこうだと新婦朝

ネオンから生まれた悪を霧が閉じ

ジングルベル聞いて地下道掘をしき

監督も売られ買われて浮稼業

岡山市 田村藤波

税務署が弾じけば赤字にはならず

牛の子が売れ農協の借りが済み

電化してコオロギ今年から鳴かず

見島市 本田恵二朗

同性愛なるほどどっちも嫁きおくれ

だしぬけに来るとは税吏卑怯なり

鳥取市 森本法泉子

單身低地に在り

台風の日から二階はしめたまま

忘年会

幹事もうきりあげ度いにまた唄い

手と言えども啄木の句を誦じ

病院の掃除は濡らすだけで済み

吹田市 橋本幸男

電光ニュース読んでバスに乗りおくれ

堺市 高崎雄声

空席へ慌ててかけぬのも床し

かかる世にこんな人がと寄附を読む

欺すのはいや陶芸も牛佑も

島根県 藤井明朗

思い出の日記あなたの事ばかり

お隣の電化近所をお茶に招び

岡山市 永松東岸

成績が良すぎて女の子をくやみ

赤字でも家庭電化の夢捨てず

倉敷市 野田素身郎

悪いとこばかりが日に日に似てきたし

自己紹介してみりゃ代理ばかりなり

酔わぬ葉飲んで幹事は膳につき

大阪市 伊達堰子

寝正月友は持つべし提げて来た

除夜ぶらりあしたの足袋と下駄が要る

大阪市 不二田一三夫

金使え金使えジングルベルが鳴り

飼育法経験豊富な母に訊き

神戸市 丸川初甫

へそくりを札束にして驚かせ

演壇へ先ず老眼鏡をかけ変える

唐津市 新岡回天子

牛公のうめきの様にためている

近道のここは通きぬ牛が居る

岡山市 池田古心

一票を八方美人にして儲け

票を買う資金が欲しい等ぬかし

東京都 石居高志

妻の死を悼む

手を曳いて焼香をする子が二人

喧嘩して泣く子抱かれる胸が無く

俺の手で子は育てたる育てたる

大阪府 早川清生

非論理の尤たるものに僕の妻

工員が娶った美女は処女でなし

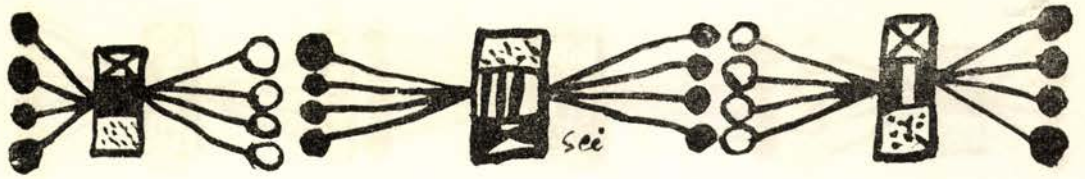
宿の客川原へ出ては石を投げ

脚本家詩をあきらめた過去を持ち

帰国談手まねで娼婦買った市議

被告席ふと笑ったを記事が衝く

岡山市 武部若菜



湯川博士夫妻講演

世界連邦推進へ笑顔美し

認証式取引すんだ顔で立ち

堺市 辻 圭水

試験勉強しても兄弟喧嘩する

もがいても定年までの職が知れ

岡山県 野々口美舟

横車押し押し女房ついて来る

割箸を頂くように見合席

思春期のやたら指切求めて来

西宮市 小浜牧人

若社長午後の行方が知れぬなり

舞子病院へ入院

一と休み一と休みして片肺の

大阪市 菱田満秋

ボーナスを貰ったら年は暮れてよし

寝ころんで謹賀新年書き送り

兵庫県 前川左文字

銀行のソファ一やつこらさと立てず

大阪市 橘高薫風子

バイブルの重さに神は無かりけり

母の入院

或る時は海の晦さを持つ蚊帳よ

十二月宝石の美の極まれり

大阪市 榊本落児

日曜日キャッチボールに起こされる

長男がキャッチャー頼むと起こしに米

ベレー帽あいつがかぶったので俺も

父と娘が同じコゲ茶のベレー帽

大阪市 西川 晃

人間を宇宙を五七五で切る

銭おいて乞食が演技する

刺青が薔び二代目後を継ぐ

蛙飲む蛇の眼をして色事師

釜ヶ崎風景

亭主が出(獄)て来るまでの情夫なり

鳥取県 田中蛙眠子

貧乏くさい歩みよ師走を襟たてて

虚礼廃止

賀状書くひまで潜った縄のれん

名古屋 野田一念

十二月待っていました飲んだくれ

出来るならドロロンがしたい十二月

手品でも使ってみたい十二月

神戸市 仲 どんたく

空巢錠二重にかけるほどうけ

やあやあと間違われとくバスの中

労働歌白衣のデモはレビユーめき

サンタもう息切れているロングラン

平田市 久家代仕男

ボーナスかフンと農夫がうそぶいた

飲めぬから貴男やっぱ頑固なの

晩秋のボブラ箒を立てたよう

岡山市 江国幽谷

空缶を叩けば丁度妻に似て

後妻までもろうて袈裟を着て歩き

知、情、意が五十の坂を越えて出来

岡山市 光好陽子

さぼるのがストの時には先に立ち

事なかれ主義で廻り椅子が来ず

西宮市 野呂鶴汀

クリスマス今日は愛想のない女給

金借りた話しを友に羨やまれ

西宮市 樋口舟遊

弁護士もことわるほどの違犯なり

短詩作品展

師の軸の前のポーズで写しとき

高槻市 辻 白溪子

素通りをする気懷手で歩るき

おき傘があつて持たずに出て降られ

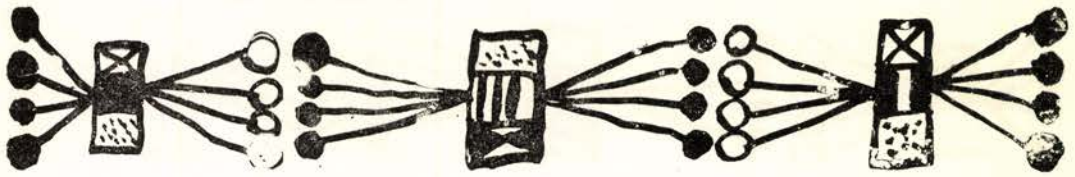
大阪市 石倉旅風

忙しいひとはズバリと物を言い

よく切れる鋏しずかなかい音

大阪市 魚住満潮

続西成界わい



新世界一文無しで歩いてい

俺の顔どうして呉れると中学生

家出の娘尋ねて梅松楼通利かな

大声で共産党に投票て来る

長い貧乏自分の姓名さえ忘れかけ

大阪府 林 昌男

白紙にせよとは虫の良いことを言う

女みな美人に見えて春が来る

愛媛県 村上 旭童

爪に火をともしとまでは言わぬ父

長ばかり並べて小さい会社なり

前借を武器にさぼっている男

鳥取市 北村 三步

恩給で食っては悪いように言い

せんじつめて人口問題にまで及び

神戸市 傍島 静馬

お剩りみなしもうて仲居に顔見られ

故郷の父候文で叱って来

水茎のあとうるわしきバーの付け

婦唱夫随おやじも株に引き込まれ

大阪市 河井 庸佑

木枯しへ子供逆らうよう走り

参観日うちでの元氣どこへやら

出血をしても契約有難し

暗い世相嘆く凡兄と同じ歳

愛という言葉の出ぬを歯がゆがり

大阪府 谷沢 好祐

自動車は兎て人は亀になり

逃げて行く若さへダンス習い出し

盲人のひがみ親切払いのけ

しとやかなあの娘がダンス足で閉め

泉大津市 高津 徹也

地下に眠って玉ねぎの育ちゆく

松茸にあたりましたといいい身分

愛媛県 榎 紫光

夜る使う金日給は考えず

拍手した音で居眠り眼をさまし

登山靴母へ内緒で買に行き

青森市 工藤 甲吉

丑満の頃内閣は出来上がり

ふところも背中も母はなつかしや

おしどりのよう赤い靴黒い靴

玉野市 伊原 明林

すき焼の味も変って唄となり

仲直りした手を借りて毛糸まく

松江市 小林 孤呂二

兄と遊ぶことを覚えた三十五

十七才とかく世間にこわがられ
ポーナスの話し鎌ダコをさびしがり

神戸市 室田 千尋

押しのけて出たが同じバスにのり

手紙書く心が動く落葉なり

豊中市 林 夢虹

明日と言う日があり落日美しし

街は雪人歩みし跡を埋めつくす

予想屋が妻子を捨てた父に似る

尼崎市 吉本 菁風

不義責める鞭は女中へだけ当り

年老いてよけいに妻を頼るなり

父親にかくれ美校を志し
西宮市 山本 一傘

政治欄親子の意見また違い

漬物の味を朝から叱られる

大阪市 今西 生蒿

丹前で立合演説覗きに來

和尚毒舌顔を木魚のようくずし

抱っ子ちゃんアブレの恋のよう飽かれ

京都市 室井 八九寸

格式も時代に勝てぬ瑞竜寺

見せたさがハチ合う八坂七五三

だらしない選挙へ棄権する抗議
奈良市 内海 敬太

そう云う俺にもマルクスが解ってず

再びを誓って淡雪の中へ消え
そやけどと大阪弁も敗けていず

これあれ旬選



林 香 部 武

路郎談言

「選者は他人の苦心による創作をわが意のままに何の遠慮もなく沙句にする勇敢さをもっているものである」

選者は如何にあるべきかという課題が、いつも私の念頭を離れぬ川柳を愛好する者が益々増加する今日、その衝に当る選者としての在り方に、いろいろ想いをめぐらせてみた。

現在のわが川柳雑誌に於いては、主幹の推薦によって川柳雑誌社の選者として認められる。そして本社句会及び、雑誌の上に於ける選者としての決定が毎年一回秋の理事会総会に於いて発表される事になっている。

そして本社句会で席題選を担担する、かくして追々主幹の推薦により兼題の選へと進むのである。次に各地川柳支部や準支部などでは、不朽洞会員である支部長が主たる選者として、あと之に準じてやっている。

選者に事欠かぬところは、うまくゆくのであるが、末端の会ともなれば、選者不足で、いきおい馴れぬ人々によって選をやるという事になり、川柳がいつも手軽に扱われ先生の談言通り佳句が陽の目もみず、没句が主座にのし上るなど、何とも困った事に相成るのである。

昔支那と云われた頃の話に、お医者さんを上医・中医・下医の三段にわけて呼ばれていたが、先ず下医というのは、へぼ医者の事で、診たても投薬も信頼の出事ない、命が一つでは足らぬというお医者さん、中医は信頼するに足るお医者さんというわけで、上医といわれるのは病気を治癒させる計りか、罹病しないように善導して患者から尊敬される名医を謂うのである。

さて川柳へ戻して、盲選によって折角川柳に志す良き芽を、開花も見ずに萎れさせたり芽を摘み取るような結果を招来したとすれば下医殿と同じく危険至極である。又正しい選の場合は順調な経過を辿らしめる点中医と等しく特に

秀れたる選によるとき初めて選句の可能性の限度は高められ上医に通ずるものである。

選者としての自覚は良心的である事、そして指導の責任に目覚めて貰いたいものである。これは私自身の心にも銘記し努力せねばならぬと思つてゐる。

今日の川柳から明日への川柳へ、先生も常に申し送りられる「足踏みせぬ」という事を、先ず選者の方へ望みたい。いつまでもマンネリでいたのでは選者としての生命は覚束ない、指導性を持つという事が如何に必要であるかは且て或る職域グループで仮にA氏としておくが指導の役割をされていたが、一人の会員の著しい進境をみて、A氏はもう僕の手に合わぬ」と云つていつの間にかやら、その会は泡沫の如く消え去った。みすみす発展途上のグループを、惜しげも無く握りつぶしたのは指導性の欠如によるものである。自分だけ育てて満足感をもつ事は、私には出来ない。

昔B選者が自身の好む植物を詠み込んだ句を天位に抜いて問題となったが、これを知っている人達が昨年〇紙読者川柳大会に於いてあたかもその選者を迎え、席題に同じ植物を詠み込んで、六七名のものが出句したもとより没にはなかったが、之は一応選者にも責任があるとは云え、この様な低級なあ

てこみは少くとも選者を愚弄するもので、引いては川柳を冒瀆している事になる。

いかに趣味でやっていると言つても句会は遊びの場ではない。句誌にあっては句境を尊重し、だから雑談に終らしめる事は控えるべきで、句会の雰囲気は台無しにしてしまふ。私がまだ本社句会へ出席以前の事、五六人の塗青メンパーで鶴町支部句会へ行つた。

「鶴町の選は厳しいですぞ」とぶつきた棒に言い放つのは幹事（今の支部長）妹尾愛人さんだ。さすがに句の上手な人であるが、誰かの一句を添作して入選にしたところ、その句主は、自分の想いに反するから、訂正するのだったに没にしてくれと、頑張つた、猛烈な論戦を展開して、文字通り川柳道場の觀を呈して私は少なからず、感動させられた。

少くとも真陰に句と取り組む意気をもり上げてこそ句会はたのしいのである。

選者にめぐまれた句会はまだことに倅せであるが、一人か二人の選者だけで、あとは新人が多いという句会の場合選者の数に合せて題を出すべきが至当である。それを考慮せず題を多くすれば、全員が選に当る事になるのだから、何とも心寒い限りである。

先生は選句を急ぐなと常に教へていられる。選句上のミスに對し

ては決して何も云われない。又うまいと褒められもない。しかしその中に温かい鞭撻をひしと感じられ、一層勉強に精出すのである。私が初めて兼題の選をやらせてもらったとき、近くの座に先生が耳を傾けていられたが、最後に天位の句を読み上げると、「ウーン!」とうなずいて下さった、あのときはとても嬉しかった。

ほつぽつ馴れて来た頃、何だか選の怖さというものが身体中を包み、選句への責任をより感じなければならなかった。

川柳人として一心に選句に向う姿は、その人のいちばん美しいときであると思う。

殊に不朽洞に在って先生が選句されるお姿は迫るような気魄に満ちていられた魂を打ち込んだ鋭い計りの態度にいられるところ正に最高の美がただよっている。この尊とさの中から我々作句する各人各様の個性を丹念に生かし高度の選句眼をもって作家指導に当られてここに三十有余年実に驚異と申すべきであり前人未踏の偉業完成である。

寒 中 見 舞

久 家 代 仕 男
島根県平田市灘分町
一八三二
藤 岡 友 子
(婦人友の会々員)



二人一組丹下左膳 罷り通る

高 鷲 亞 鈍

私は川柳家の雑文には、人生を知った顔した生悟りに反撥を覚えても全り感動したことはなかったが、昨年「川柳平安」十月号で高須三味氏が何か交通事故で災禍を蒙り、左腕を失くされて二年目

身のにわか不具者を嘲って切々の文章を綴った「不具者の悩みを」――不具の川柳家が詠う――を読んで、心底から衝きあがってくるものを感した。

その夢手になってから始まった人生体験を句に詠んで……

汗・蚊・蠅 隻手でしのぎ得る夏か

友情は隻手で食えるものを選び

友情は井の箸割ってくれ右手が痒い犬のように噛むか

などとその時折の自作品に説明を加えてから

――ボクは前述のような理由で、まだまだ隻腕の句を作っていくつもりである。「病人のほんとうの悩みは、医者には分からない、病人自身の訴えによって、

それを医者は探って行くのだ」と真の医者は言う。隻手になった苦しきは、隻手になった者だけしか知らない。ボクは川柳家だから、それを川柳によって訴えたい。

と語っている。ボクは前述のような理由で……とといった前述とは――かの△長崎の鐘△の水井隆博士は、白血病になり、自己の血液を顕微鏡下に検してその写生を医学界に遺したり、或る若い医学者が小児マヒを己が身体にうつして、病菌が己が身体に犯すさまを記録して医学界に貢献したのに類するものとは誇示しないまでも――

己が隻腕句が川柳家から隻腕になったタッタ二人（隻腕の先輩、東野大八氏がその一人）のうちの一人であるから、いままでの柳界で誰一人うたったことのない隻腕川柳をつくって後世にのこすという覚悟のほどを示すものであった。

句作経験四十年の咄三味氏の柳歴を深く存じあげない私ではあるが、これは素晴らしい心境の変化、思ったのだ。隻腕の苦悩を訴え、

その体験記録を書く、と誓う凄まじくも悲愴な咄三味氏の決意は私の希う詩川柳家の態度といつて可いものだろう。人間内部から訴える真実の声。作品の主体性をモチ

ーフにもつこと。例えば隻腕でなく隻脚の鬼句として知られている大門氏の△ししまい風呂一本足がとんでくる△は△ししまい風呂一本足でとぶわたり△と身体障害者の側から詠うものであつて欲しいと希望するのである。（勿論原句の価値は充分認めるが、この場合詩川柳を表現の上で改作例証した）

今どき五体が揃い、身体丈夫、家庭円満など全一の人生を送っている人間のモラルで作句された泰平な川柳家が社会や人生を穿つ外部世界は余りにも無風帯である。しかしその無風帯と見える社会や健全と思われる人生は波浪高く、不健全な空気に窒息しそうである。片目、片手の半身で生きる丹下左膳の方が真面目に社会にたちむかい、人生を苦悩して真実に生くる尊い姿なのである。そうした見地から、己れが作らねば、

誰か己の川柳を作ってくれるのか、と気負ってひたすらに己れだけの体験、経験、直感の一連の主情を詠いあげてこそ句に永遠の生命をもつもので、永井隆やアフリカ辺士で倒れた野口英世などの科学者と態度は同じでも、目的はいささか違ふと考えるがどうだろう。その真とか美の対象の相違に於て……

これも昨年の夏ごろだった。奥さんの若菜さんに手を曳かれ、郷里岡山へ去る盲目の武部香林氏を大阪駅で見送った。本社や支部会の盛大な送別会やいろいろの送別宴が前月までにギッシリあつた為か、当日の見送りはごく近親の者に限られていた。それにも拘らず私が一枚馳せ参じたのは同病相憐れむで、三十二年の五月、期せずして同じ緑内障を患い、阪大で両眼の手術を彼はするし、私は阪大系統の湖崎眼科で治療を施されていた。それ以来の柳友にダブる病友であつたからである。三年後彼は全盲を標示するに黒眼鏡をもつてブラッイトに立てば、私は既にスベアのなひひとつの命と同じひとつの明り窓を通して彼を脳裡に撮しとつたのである。

「メクラが眼の開いていた時のころの句をつくるな。メクラはメクラの句をつくるのだ。分つたか。心境だよ。ネ心境を吐露するんだ。頑張れ！」

動きたす車窓にひびられながら私が叫んだことを聞きとつて

スマートで
着心地良い

O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

くれたか、どうか。緑内障の全治は絶対に望めず、視力に限界があり、視命に限度があつて、私の独眼として怪しいものである。私はベイトオベンのような音感をもたず、北原白秋のように詩才はない。まして栗島すみ子や原節子のような美しい銀幕の過去をもたなければ、徒らに醜を世間さまに晒すことだろう。

――それはおまえの悪酒のせいだろう。

――いや、おまえは女の怨みからだろう。

――いや、会話を潰した債権者の呪詛が癡ったからであらう。

と身をうつ苔枕に至極御尤もと苛責する日とてなかった私であったが、しかし、しかし、なにが、なにがと、次第に不逞な精神にく

り変っていった。

大抵現在の医学では内障の原因は不明とされ遺伝や伝染でもない、全くの宿痼である。相対的に生きとし生ける庶民の人間に酒や女や金に呪いをもったり、もたされて、互いが互いを裁く権利がどこにあるか、と問いたいのである。酒必ず身体に悪いと限らず、女の怨みは美德であるのだろうか。債権、債務は納得すくめである。借った金を戻さないのは悪いが、貸して戻らないから、と悔むのも悪い。こんなことを考えていくと目明きは幸せて盲目は不幸とばかりは云えず、鳩保己一は目明き盲目は不自由じゃわい々と云ったところでは、盲人より目明きの方が不幸でさえあるというものである。

私が杏林氏を見送った時に奔り出た飾りのない辞は決して、盲目を美化し、ひけらかして言ったのではない。私自身そのころの心境を詩篇にしてN・H・Kで発表したりしたのは、前節の啞三味氏が隻腕になった、隻腕川柳を専念作爲することに決めたあの感動の文章と同じ立場であった。

昨年の九月、四〇〇号記念出版を下して発表された東野大八氏の「風流人間横丁」が旧臘に出版された。昭和廿八年五月号から毎月寄稿を仰いでいたお馴染みの大八随筆を二冊に纏めハボ二段組、二六〇頁の堂々たる随筆集である、

フランス風背綴に野尻弘の表紙絵人間立像に淡紫色をベタに半色かけて純白の紙質には路郎師の題字で風流人間横丁とある。装幀その他に卒なく愛書家からも難のうち所がないのは流石に川柳雑誌社版だけのものはあった。

元来私は若いころから老人好みの随筆に興味を持てず、筋道を辿っていく小説ばかり読んでいた。人間横丁にしても大八氏を個人的に知らないままに、こんな男のなにが随筆、と殆ど読まず、てんで問題にもしていなかったが、今度一冊になったのを一頁から読みはじめ、思わず膝を叩いて、これは大したものだと一人合点してしまっただけである。

第一私の読書欲をそそったのは第一頁から始まるコント風の「哀妻物語」で、マンマと随筆嫌いをひっかけた大八の魂胆には負けず。もっとも私如き者に読ませうと下心あつてのこととは思われないが、昭和二十二年二月の「壁のない部屋」を後にして二八年一月稿の「哀妻物語」を第一巻にもってきたのは、「露店市の旗」「維果の酒」にみる終戦前後の北京風景。現地召集になって「許昌の腕」で述懐する最前線の臨時野戦病院での荒くたい手術に、片腕を落す凄絶な体験。「青いベレー帽」まで全頁の三分一位が最上の読みどころで、私は一気に読みあげてしまったが、しかし仔細にみると実は著者のこまかい心遣いがあり、私

のような読書が嫌いで、殊に淡々たる随筆のさりげない良さを知らない者には、それからそれと興味をひきつけていく小説的な伏線を隠したもので、そこへ流達な文章は完全に玄人の域であり、素人臭い川柳人のものとはわけが違うと、言えは褒め過ぎだろうか。それはそうであろう、彼が文学青年のころ横光利一や藤沢桓夫の新感覚派の文章を勉め、川柳に習得したというのだから、その辺の雑なブン屋にみる社会部記者と相違する所以である。

私は今、全般にわたった詳細な紹介をすることは本稿の目的ではなかった。

不肖、拙著「詩川柳考」の校正刷を川柳雑誌社で検べていたところ、傍にいた路郎師へ「四〇〇号記念の出版には先生の「窓口談義」をあと廻しに隻眼隻手の重鈍大八一組の丹下左膳を世に出すわけになりますな」と笑ったことがあった。話は高須啞三味氏の前掲の文章に戻るが、

現代川柳界で、腕を一本切つてとられたのは、前に「万才と挙げて行った手を大陸において来た」(スギ・アキラ作品)東野大八君と昨年二月「孫を抱く手を切りに行く救急車(白句)」に乗ったボクとの二人だけであろう。ところが大八君は、その後自分の隻腕の句をほとんど発表されない。それは「不具をひ

けらかす」ことに嫌悪を感じてであろう……と不用意に書いていたが、なんのなんのひけらかし、茶化らすどころか、今回の「人間横丁」十三頁の八隻手雑記で十四句ものしているから全句掲載してみせよう。

隻手には 腹の立つのに鋸があり
風呂へ来て またつきまとう眼に疲れ
腹立てる 用に気付いて妻が佗び
妻の手を借りて 茶漬の味となり
置いて食う茶碗左手懐しく
夢はまだ両腕のある愉しきよ

一本の腕へ 或日は力こぶ

腕ぐみをむづとしたころ幸せな
妻だけが裸の夏にさせてくれ
歩く妻 手のない肩によりそうて
ひがむまいそう思うのがひがみだが
うれしい日丹下左膳を真似て寝る
わびしきは手のない袖へ風が吹く
大陸に残る片手も淋しかろ
これら、啞三味氏の今後の隻腕川柳とともに大八氏の川柳記録は後世まで残り、身体障害者達はこのらの句を詠んで天地のひらける思いに身の苦悩から解放されることだろう。

(一九六一・一)

高鷲亜純著

詩川柳考

B 6型南入 定価三百八十円 送費四〇円

▼著者は曾て創生期ごろの超現実主義者であつたがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した/今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す/ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る/凡そ前向作家を自負する柳俳人絶対必読の書
★お待たせしました/快著出る/

★五〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇

(五〇番をご利用が便利です。)
(切手代用可)

大阪市住吉区西内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話大阪06081振替口座大阪75050

らばこの句の場合だと「置物のよう」をむしろ「置物になり」とかと行く。「よう」ではなんとなく生ぬるいからである。ところで置物が果たして幸福かどうかは疑問。

清生—いつ見ても奥の間にじつとうずくまっている老人を土蜘蛛のようだと感じたことがありました

が、そんな境涯も本人には楽しいものでしょうか。老境に遠い私には想像もできませんが、そんなときは自適の心境になれるのかも知れません。「たのし」が安易かつ説明的のようにも思いますが、実感とすれば結構な句です。しかし置物のように老人がいるというのはやや常識的で、それが楽しからうが、退屈であろうが、句としては平板で、少し飛躍と驚きに乏しいのではないのでしょうか。

文庫—若い人の心の琴線にはふれないかも知れないが、年寄りの私にはまことに名句だと思います、目を閉じて静かにこうした老人の姿を思い浮べて見て下さい。何となく明るいあたか味を覚えると思います。

久米雄—ほんとに実感の句ならばまことに結構な、平和な句でしょう。他の人が見たのしそに見えようが、可哀相に見えようが本人がたのしかったならばそれでよいと思う。置物のようはその老人をたとえているので別に取り去る必要はないように考えられる。ほくも五十越えて来たので願

わくばこの老人のようになんていい老後であれかしと願いたいものだ。

甲吉—「置物のよう」を川柳味としていいのでしようが、私は少し安易ではないかと思えます。「年をとれば床前の置物」とは地方でよくいわれるコトバです。

清生—共感こそ文芸の基本だから皆さんの共感を得ただけで、この句成功したと言えましよう。満ち足りた情感とただよう詩情が感じられるようです。私も老後はぜひこのような境涯に安住したいと思

います。しかしそう言った身につきまされての感慨がこの句の評価を妨げてはいないでしょうか。第一に現実感が薄いように思えます。現代にこのような何ものにもわずらわされない幸福な、あるいは悟入した老人が果してどのくらいいるのでしょうか。また置物のようにいることがあきらめでない、ほんとうにたのしいものでしょうか。第二に「置物のよう」でなく「よう」であって「に」が略されている点に少々抵抗を感じます。略した理由はわかるのですが、だからと言って無条件にこの種の省略が許されるものでしょうか。第三に比喩が常識的すぎることで

す。比喩は新しい経験の世界を創り出すものですが、読者のイメージを限定しない暗喩と異なり、原則的に「ように」で説明される直喩は斬新なアナロジイを見出さない限りあまり意味がありません。その点この句は類型的かつ安易なみずからの情感におぼれた把握だと思ふのです。以上はめる人が多いので均衡上注文をつけたと思つていただいて結構です。

○ 無いないと云つても女すこし持ち

青風

文庫—女心の手固たさを描いて申し分がない、男なら「すっきり使い切つてしまつて」と云えば三文も無いのが普通だが、金にしろ物にしろ無いと云いながら少しは内緒しておく女の気持がうかがわれる。

久米雄—時には例外があつて、これと反対の女の人もおるだろう、が大体においてお説のとおりである。云つてもがすこしきこちないのでも少し表現を変えてはどうかと思う。云い云い——とすればないない云い云いと重なつて来るようになる。

甲吉—そこを見込んでの頼みかともかく川柳らしい川柳だと思

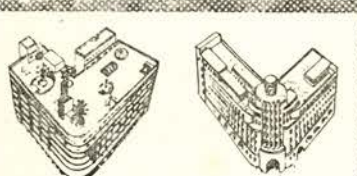
う。だから前衛派からいわせるとオソドックス過ぎるということになる。しかし私はこの句をそのままそっくりいただく。ただちょっと気になるのは、この場合の女は果たして何者かということである。女房なのか若い女性なのか、それとも恋人なのかヒモツきの夜の女なのか。すべての「女」というものがそうであるという意味でもよろしいのだが。

清生—妻か母か、多分家計の経験がある女でしょう。とにかく日本的な女性を感じます。私といつしよに仕事をしている高校を出たばかりの女の子など、給料日の直後に派手に使つて、すつからかんになって、後はほんとうに無一文でけろりとしている。句のような心情が泥沼に咲く女性に残照のように残っている純情と結びつくと、老女土好みの人情小説となる。「女」がもっと具体的に活写されると、句の趣きもぐつと変るでしょう。私ならこの句を素材として、そう言った風にも作つてみたいと思ひます。着眼はよろしい。

文庫—「無いない」と云いつつ誰それ少し持ち」と云えば座興の楽屋落ちになりそうだが、この句「女は誰でもこうだ」と云う訳ではなく女の多くはこんなものだ云う句で

「男と違つて女は大体ちゃっかりして居る」と云う点を描いて居るのではあるまいか、その意味で佳い作品だと信じます。

久米雄—諸説に尽きています。着想は無条件でいただくが、表現の点において物足りぬのもっといい表現の方向へ進みたい。甲吉—ともかく一応文句がありませう。しかし何かしら物足りない点では久米雄さんと同感です。



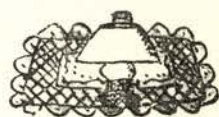
「お買物」 は近鉄で!!



アベノ上六
近鉄
アベノ77-8331
上六77-3331

清生—好青年青風くん女性を詠んだ作品が多いようです。彼も年頃だからな。ところでこの句が少し物足りないと言われるのは観念だけで（観念だけのものが悪いというのではない）この場合具象性がないからでしょう。どんな女かはつきり示されれば鮮明な印象が与えられ、情景がもっといきいきしてくると思ひます。また私はこの句の女性のちゃっかりさより、堅実さなしいは小心さを感じるのですがどうでしょうか。「無いない」でなく「無いない」と調子を変えたのも心遣いが行き届いています。

(担当・卓銅一鳳)



「日本」研究への序章

戸田 古方

二月十一日はかつての紀元節でした。これからも紀元節であるとして連中が年中行事のようにまた騒ぐことでしょう。

一日休みがふえたらいいのになんかという人は論外としても、国民感情としては、国のはじめを寿ぐということは決していけないといえませんが、戦後の歴史教育に關係しているものの側からはいろいろ問題があるようです。

第一に日本人の手になる最初の歴史書、古事記、日本書紀をどこまで信じてよいかということです。

古事記、日本書紀の内容は神代からはじまっています。そのはじめは各民族のどれかももっている創世神話です。それは神話であり、説話であって、歴史とはなり得ないのです。日本の建国が神武天皇ということになっていますが、その時代の決め方がどうかという事です。天照大神の話の中に織姫のことがありますが、生糸がつむがれ絹ものが織られたのは今から二千年前で、西暦の紀元頃よりさかのほれないということに

なっています。二千年前の遺物の中に骨製の絹針と断ぜられるものがはじめてあらわれています。

歴史はすっかり科学的になりました。大陸の本田耕作文化とそれにつづく金甌文化が入ってきますが、それがやはり紀元頃だといわれています。

神武天皇という方のおられたか、どうかかわらないということとは別に、西から大陸の新しい文化が東につたわって来たことは今日語られる歴史にもみとめられています。この事実を説話化したものが神武天皇の事なのでしょう。

次に西暦即ちキリスト紀元と日本紀元につたわる皇紀との間に六六〇年のずれがあることです。

皇紀というのはすでに江戸時代から間違いとわかりながら信じさされて来ていました。

あの二千六百二十一年という年数、それが定められたのは聖徳太子の推古天皇九年のことでした。その年にはじめて大陸から暦が入って来て、大陸への国威発揚のために日本の古さを示すために、推古九年を紀元一二六〇年と定め、

国初を一二六〇年前に定め、その年を以て神武紀元元年としたのであります。一二六〇年というのは十二支十干による個人の還暦六〇年を二十一倍したものでした、この二十一と云う数字は中国でいう国家革命の年に關係があります。この一二六〇年の間に伝えられる天皇の在位を入れたために何人かの百歳を越える天皇の寿齢を数えることになりましたが、それもこれもすべて作りごとであることを否定すべくありません。

知らないならばとにかく、そうとわかってみるとこの神武紀元の不合理をそのまま頂きかねるのであります。

只今の歴史は、かつては、中学校、女学校の上級生、又は旧制高等学校で学んだ文化史が小学生の世界にまでたれ下ってきました。

土器時代が神話に変わって歴史のはじめに出て来たのであります。即ち縄文土器をもつ文化時代に ついて、弥生土器をもつ文化時代の話からはじまりまして ついては金銅器時代、さらに古墳時代とすすむのであります。

今、紀元節を定めることに反対する理由の一つは、天皇をおいたわしい程引きずりまわして犯した太平洋戦争という大きなあやまちを再びくりかえすことをおそれる人々によって支えられています。

明治の出發は鎌倉以来つづいて来た政権が徳川末期に至って、全く行きづまってしまつて、新しい指導精神が武家時代以前にかえすこと、即ち天皇中心の時代にかえすことであります。それに列国との關係から富国強兵政策となつてそのため天皇中心の必要が倍増せられました。天皇をこのように利用したのは関ヶ原以来、陰に陽に幕府に圧迫されていた薩長の武士たちでした。明治政府を薩長政府だとか薩閥政府だとかいわれる理由もそこにあつたのであります。

終戦後はすっかり様子がかわつて、強いられたものであつたとしても、天皇は自ら神の座から降られました。

戦後一、二年の空白時代をへて書き改められたのが只今の歴史であります。

弥生式文化時代の半ばが丁度二千年前の紀元一世紀であり、その頃大陸から、水田の稲作文化が つたわつたと述べられ、この文化を自分のものとした部族が統一をすすめて、日本國家を合一したのであります。それは青銅器文化時代のことで三世紀乃至四世紀といふことです。

この根拠は中国の史書によつて います。邪馬台国という北九州にあったと考えられている国が 大きく出て来ますが、その国の位置は北九州とも奈良県の大和とも今だに決めかねているあたり、天皇を中心とする国民の出来上りを如実に語つております。

天皇の位をはつきり示す、三種の神器はすべて金甌文化時代のうみ出したものでありまして、いわゆる神話時代が今日ではこの三世紀、四世紀より古いとは思われないのであります。

統一がすすむと、この中心になつた天皇家はすばらしく発展しまして、大陸における漢帝国の没落と相應じて半島出兵となります。そして仁徳天皇の世界一の規模をはこる大古墳となるのであります。

只今の歴史はそういう風に大へん合理的に説明されております。

この歴史の説明によると天皇はその当時より日本の国の中心であり、日本有数の旧家であることに 是間違いないにしても、神でなければならぬ理由は見出不いのであります。

明治は遠くなりにけり、明治歴は、もう初老をこえた人々だけになりましたが、今の指導階級の中に大きく位置を残してあります。しかし、明治の頭のままで、いつまでもよいとは申されません。天皇に対しても一応割切った考

同舟近詠

え方をもつていいと思うのであります。日本を考える時、天皇に対する考え方をはっきりさせておくことが何より大切だと思うのであります。

天皇家の勢力は四世紀から五世紀を頂上として下向きます。聖徳太子が十七条憲法を作ったり、和の精神を強く叫ばれたのには天皇家の勢力回復の意味を多分にふくんでおります。強引に自家勢力を押さずに、文化でこれをつつみ、日本の幸せのための手段として天皇中心を考えられたところに太子の偉大さがあります。その志は後の大化の改新や天平の文化と花さくのですが、ととのったのは形式だけで、内容がも一つしっくりしていませんでしたために欠点いろいろあらわれて、平安時代に入ります。平安時代は一応天皇中心とはいえ、実は藤原氏の影に天皇はかくれてしまっていたといえます。そしてやがて武家時代に入ります。聖徳太子とちがってガメツク頭を上げて失敗されたのが後醍醐天皇です。

醍醐天皇でした、そしてそれにづく足利時代には見る影もない天皇家の衰微時代となります。

しかし不思議なことに力のなくなったはずの皇室が見棄てられず、信長、秀吉さらには家康に支持された理由はどこにあったのでしょうか。三者いずれも天皇の名の下に天下の統一を考えたのにはまちはありません。

彼等は天皇を利用したと考えてもいいと思いますが、この力のない天皇が何故利用価値があったかということなのです。

ここで私はその理由を考えてみずにはすこさねいのです。

三世紀、四世紀に天皇国家が生まれましたが、それはおそらく力の問題だったと思われませんが、その方は大陸からの新文化になえず裏付けされていたのではなかったでしょうか、仁徳天皇の大古墳時代は思うがままに大陸文化を活用していたのだと察せられます。

天皇は力の中心であったかもしませんが、それとともに文化の中心でもあったのです。

三月のひな祭に緋のもうせんの上に飾られているのは皇室文化の姿であります。

日本国土は一万年位まえに出来上ったといわれていますが、アジア大陸の東辺にへばりついたような列島の姿は今日と変りなかったのでしょうか。そこへ北から南から雑多な民族が来住して原日本人といふものが出来上りました。優秀者が最良の地を求めて来たものが、敗残者の吹きだまりだったのか知るよしもありませんが、各民族の長所とともに短所も今の日本人の中にいろいろ残っています。又後天的なものも軽くみるわけにはまいりません。

周囲は申すまでもなく海で、日本は海国として誕生し、海国として発展して来ましたが、大陸との関係が思いの外大きく、海国特有の進取的でいつもあったといえませんが。

どの民族にも共通する牧畜時代が日本人の社会には見つかりません。

んが、それは大陸のすんだ農耕技術伝来のせいとも、海の幸が豊かすぎたためともいわれております。

温帯のすべての地域にわたっているこの国土は春夏秋冬のけじめがはっきりして、いつもあたたかい自然のめぐみの中に生きてきました。自然をたのしむ自然詩が短詩文学の形をとっていち早く国民に親しいものとなりましたのも他に類をみないところであります。

しかし他面、天災という自然のきびしさにたえず見舞われて、事大思想が、そのすきにしのびこんでもいるのでした。

自然のやさしさにいつも包まれていたのが天皇います都でありました。日本文化は都を中心に伸びていったのでした。文化にあこがれるのは人間の本能でも申せましょう。文化の象徴である天皇はその勢力の強弱にかかわらず、国の象徴として尊敬の中心でいつもあったのです。天皇の地位は中正公平で、不変でありました。天皇は力の中心ではなかったが中国の帝王のように易世革命は日本にはありませんでした。いつも象徴であり、憧れの中心でもありました。文化の中心であり、いうなれば徳の中心であったともいえたのでした。

終戦後の日本国憲法ははじめて本元的な天皇のあり方を法文化したものとといえます。

疑いたくないのですが、近い過去にあった如く、天皇を神にも一度してみたい人々の声が紀元節復活の中からこえてきそうなのです。天皇の名の下に再び過失がくりかえされそうに思えてならないのです。

歴史のうきを鳥瞰図のように見渡すやり方には不賛成な方もあるかもしれませんが、しかし、こうした見方の中から本当の過去の姿がうかび上ってくるものと思うのです。

川柳は人間淘汰の詩、人生や社会を批判するところに意義を見出しているわれら、過去を冷静に批判する目の中から現代の正しい批判が生れてくると信じます。春秋を讀み、故きを温めることによって、現代を解明する鍵を発見出来るのではないのでしょうか。

わが愛する川柳がよりあつみをもつてのび行くためには自らを探らねばなりません。自らのよって来る過去を正しく認識してはじめて自らを正しく知ることになるのではないのでしょうか。私の「日本」研究ははじめたかったのです。

日々の作句の中に教訓め歴史との照合のあることを付言したいと思うのです。

機会があれば、現代句の民族性歴史性とか日本人の国民性に筆をすすめてみたいと志しております。

今治市 長野 文庫 一歩も二歩も嫁に譲って平和な日

赤じゃけつ着て本などと縁遠く
煉炭の上で読まれたらしい本
詐欺手口教えてくれる推理もの
本持った姿彼女へやる写真

和歌山市 秋月 宏方
文化都市降ればこんなに水溜り

チンドン屋師走の人に追い越され
易の灯へ親にそむいた掌を預け
ガム噛んでいて自衛隊頼りなし
先輩の不運を見たり十二月
十二月子のない二人旅に出る

新居浜市 月原 宵明



褒 似

富士野鞍馬

狼のくそ火にくべて笑はせる

(拾五・傍三)

打ち揚げるノロシ(烽火)

の火薬は、狼の糞で製造するといわれ、ノロシをまた「狼糞」とも書いた。この句は幽王が、ノロシを揚げて褒似を笑わせたことを詠んだのである。

つんとしたのに幽王はくらひ込み

(万明五)

幽王は笑くほを見るに物を入

(万明五)

褒似は、周十二代の王で、褒似という寵姫に夢中になって、只管その機嫌を取ることにつとめたが、さっぱり笑顔をみせなかった。そこで褒似を笑わせる一策にノロシを揚げて見せたら、ようやく笑った。というのである。

のろし見て笑ふ后に王のろし

(タル五五)

幽王はこそぐる事に気がつか

す
イヨ玉屋などと幽王平気なり

(九九)

花火見る度お姿は笑ふなり

(一一三)

とんだ花火をうれしがるおそろし

(二五)

ノロシというのは、元米戦略の合図に揚げるものであるのに、それを幽王は愛人褒似の媚を得るために揚げたのであった。それで川柳は、なぐさみの花火と洒落ている。

そのノロシで、軍勢は集り市民はどんな急変が起ったのかと騒ぐ状態を、高い所から眺めて、褒似は笑みをうかべたので、幽王は満足したのであろうが、集まった将兵は、「なんだばかばかしい」と引揚げたであらう。

笑ふので四百余州の民は泣き

(タル五九)

一ト笑に四百を泣かす烽火台

作家戦後される目囁

さん子風薫高橋

柳白清水

これらの句には私の持つことの出来ないものを持っているので、作家として羨望に堪えないのだが、こうした方向だけに進んでしまっただけな方向に進んでしまった。紙面がないので理由は省くことにする。

牛の背で笛吹く恋がしてみたいし。

庭石の一つにおりて爪を剪り

作者の心にくいまでの描写を感じさせられたのであるが、家庭人としては、また、

どの皿も缺けていず子のない夫婦

あかつきの光を得たり子と薔薇と

熱の子へ眼鏡をかけたまま眠り

三輪車ポストへはまだ背が足らず

と、よきパパぶりを詠んで居られるのである。そうして落つき払ってこんな句も作って居られる。

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海人形も器量の順に売れてゆき

日銀は誰がはいってゆくでなく

或る時は海の晦さも持つ蚊帳よ

海女の墓陽は海に出て海に没る

昭和三十年の三月頃から川柳に入って三十一年には近作柳梅の巻を二回も飾られたのである。現

在は川柳編集局で仕事をして居られる。世話好きなために川柳の雑用に追われるのか、支部などで選をされるためか知らないが、最近個性の良さがきよくなくなったように感じられるのは残念である。今年はそのことを超えて精進されることを祈るものである。

(前号の切後番便したため本号へまわったこととおことわりします。——編集局)

川柳的二話

正本水客

「毎度お引立に預り厚く御礼申し上げます。さて、このたびお届け申し上げました〃お歳暮御室内〃の中で〃〇〇〃角瓶化粧箱入一二〇〇円〃は〃一二九〇円〃の誤りでございましてので謹んで……」師走もそろそろ押し詰った頃、Aデパートからこんな葉書が舞いこんだ。なかなかやりおるわいとニンマリ笑えてきた。わざと間違えておく新年の宣伝とみるのは余りに川柳的であらうか。

茶の間から子供達も思い思いに散って止まった夜の夜を、私はひとりテレビで井上千代の七草をみていた。去年、新生新派の「京舞」を見て

(「一三〇」)
 後の外わらひてが一人なし

(「一九」)

こういうことが度々なので、しまいは、ノロシを揚げても、誰も騒がず、軍隊も集まってきた。そして幽王は褒の愛におぼれて、政治を忘れていたのである。

四百余州に狼の糞が切れ

(タル一〇三)

花火に身代幽王入れあげる

(「一八」)

その隙に、申候、西夷、大戎の大軍が攻め寄せて来た。そこで急を告げるノロシを揚げたが、いつも褒似を笑わすための座興のノロシであるので、将兵は「またか」といって、軍勢は集まって来なかった。そして幽王は、驪山の下で遂に殺され、国は滅びたのである。中国は昔四百余州とあった。

笑ふ門禍の来た烽火台

(タル一二六)

きげんよく幽王身代をつぶし

(タル二二)

古今東西、女はおそろしいものである。これは、紀元前七百二十一年のことと伝えられている。

幽王のしまいが本ンの笑止なり

(タル一五)

紂王は狐幽王犬がくひ

(傍 五)

浄るりでは、殷の紂王が狐の玉藻前に悩まされることになっており、幽王は犬戎にほろぼされた。

幽王のした跡トをする鳥羽の院

(末 二)

謡曲「殺生石」には、「天竺にては班足太子の塚の神、大唐にては幽王の後褒似と現じ、我朝にては鳥羽の院の、玉藻の前とはなりたるなり。」とある。それで、

天竺の唐のと玉藻なれたもの

(タル一一)

三国を廻しに取った畜生め

(「三八」)

女一正三国をさわる

(「四〇」)

大内へはうじ直したものが来る

(万安七)

などと詠まれ、「ほうじ直した」は褒似をきかせた趣向である。

二ヶ国追放神国にて死罪

(タル一四一)

褒似は天竺から渡った、金毛九尾の狐であった。という伝説になっていて、我国へ渡って来て、陰陽師安倍泰成に見破られ、三浦之介義明、上総之介広常に討たれて、那須野の「殺生石」と化したというのである。

近頃めずらしく感銘をうけたことを思い出した、先代家元に面識があった訳ではないが、花柳章太郎その人が八千代に思えてならなかった、殊に百才記念に狸々を舞う場面は圧巻であった。京舞はできるだけ動きを少なくして、静のなかに動きを求めるのが本来の心であるとか聞いている。実際みていても両手を休めの中より外へのはずことは稀にしかないような気がする。舞のことは分らぬままに、無駄な動きを極端に省いて精簡だけを表現している心が、十七音に制約された川柳の心にピンピン通ってくるものを感した。私の句も、この静の心でありたいと、つくづく思う。

舞のことは分らぬままに、無駄な動きを極端に省いて精簡だけを表現している心が、十七音に制約された川柳の心にピンピン通ってくるものを感した。私の句も、この静の心でありたいと、つくづく思う。

ありがたい和尚さんである。一皮剥けば何んでもござれで通る人、と言っても、延命院のような色悪をいうのでは無い。深川は霊岸町で産声をあげたちゃきちゃきの東京っ子、十代で雑俳の仲間入りをして、二十代で大家の尊称を奉られた秀才、和歌、俳諧、川柳、冠句、都々逸、何んでもござれで、衆生済度の半面川柳の向上に努めた。

万の議論より一句の力、これが丸さんの生命であった。(以下略)

★次に目次を挙げておく。

「自選五十句」「丸さんの思い出」関口文象、「戦前の句」「戦後の句」「嗚呼丸さん」大木笛我、「長屋の句」「追悼献句」「追悼句会」「跋」塚越迷亭。

★昭和三十五年三月十八日発行。三三三頁、価三五〇円。発行所東京都中央区日本橋人形町三ノ六川柳長屋連。

★法蓮社文藝上人得阿川柳義豊大和尚(俗名西島義豊)近いて三年三月十八日の祥月命日に川柳長屋連によって刊行されたもの、故人明治三十六年から昭和三十三年に至る五十余年間にわたって作句を続けた精力的な作家である。

★村田周魚氏の序に、
 仏ただにこやかにいる恐ろしさ
 信は莊嚴より起こる、で密壇に座した西念寺の住職、西島〇丸親下を見た眼には、たまごの割りようもあるめえ……と思うくらいい

句集 〇丸帖

句集 ねずみの目

桜井六葉 著

★自序から

私の最近五年間の発表句千句内外のうちから、自選したものがこの句集である。

書題を「ねずみの目」としたのは深い意味のあるものではない、私は明治三十三年の子年生れだから思いついたまでである。

句は天分と努力とがミックスされて、よいものが生れると、それを人にも言っている私は、残念ながらそれとは縁がうすく、二十何年前に「家」という句集を出したあとで、まずいことをしたと後悔したが、こんどもあとでそうなるであろう。(以下略)

★昭和三十五年五月二八日発行。一二頁、価二〇〇円。発行所金沢市泉野町三七えんびつ発行所。

★著者は北陸の重鎮。「柿の木に柿の実秋をくりかえす」「税務署の好青年と折合わず」等の句がある。

山田凌申氏の「あとがき」によると、句の発表については非常に慎重で、作句後もいくたびとなく推敲されるそうだ。

・寒中見舞・

八木摩太郎

八木徳子

堺市九町東一丁山之口前
 電話堺②七二三五番



近作 柳樽



麻生路郎選

北川春巢選

溜めて見ればカマボコ板も五十枚 岸和田市 内藤きさ子

盛花も一輪ざしも菊が揺れ

案山子にもお辞儀をしたい選挙戦

ハンドルの片手は柿をかじってる

踏切を渡る竹屋へ皆つづき

大売出しに便乗してる辻易者

税務署にゴルフのカップ皮肉られ 小松市 関戸宗太郎

くもの巣が気にさわる程親父癒え

売る程もなく吊し柿食い飽きる

小児麻痺みたじジュニヤート選画

金一封中身を云わず奢らされ

月賦月賦で妻の手が綺麗

油切れた顔がならんで十二月 熊本市 田口 麦彦

特価品売場たしかに十二月 同

人生に友あり肝臓酷使する

インスタント時代愛の缶詰 出で

木枯しへ夜学の灯だけしかと点き

キリストは知らぬネオンに迎えられ

閉店に自分の顔をと戻す 松江市

寂しさの塊りとなり窓に佇つ

かくも隔つる心なるかなめ逢い

靴がちび心がちびて十二月

給料を頼りにされて嫁きおくれ 竹原市

膝少しくずして女うちとける

病人が食えば食うたで心配し

鯛の尾をのぞかせてゆく仕出し箱

とりとうない歳をおめでと 鳥取県

米売紙幣を読んでるごっつい手

月見では虫を聞いては淋しがり

母の子に長男までがなりたがり

洗髪女にかえる日雇婦 青森県

顔パスも効いて定年近うなり

小細工は嫌い出世を棒に振り

本当の友で共鳴してくれず

同

同

同

同

田中 妖人

同

同

同

杉原 愛鳩

同

同

同

鈴木村諷子

同

同

同

木村 凉人

同

同

同



句評に寄せて (5)

直原七面山

そしてその句がどうみてもなにか一つ欠点がなく、完全無欠のものであるならば、その時初めてありとあらゆる美言麗句をもってこれを賞し、句意がより優雅に、より強烈に、より感銘的に人々の胸に響き渡って行くよう、自己の持つ全ての能力を発揮し駆使して、その句ビッター(名句評の内容は必ず句主の作意の根底を深く突きの確にとらえています)の句評を提供しなければなりません。

評者がその句をとおして(仲介、媒介として)句主の作意発想の根柢に触れるならば、必ずその句にふさわしい句評が生れて来るに違いありません。疑うまでもなくこれが選者の選句能力につづくものであります。

句と句評は一枚の紙の裏表であります。離れて存在することを許されぬ宿命のもとにあります。

それなのに句評は創作なりなどと言語し、あたかも句評は句から独立してその存在を許される



病床に恋抱いている千羽鶴 西宮市	末沢 花美	倅を金に頼って怖く生き 京都府	大久保 和歌山
ジングルベル外を消防車が走り	同	落ちた銭顎で教える懐手	同
着ぶくれて着ぶく病床の身 くさば	同	サイクリング女とわかる尻を振り	同
病む胸に神住み給わず人を恋	同	拾い屋にありつき保護をうち切られ 大阪府	広瀬 挽郎
仲人の腕は牛連れ見つけ出し 美祿市	安平次弘道	血を売るためにすするイモがゆ	同
置薬でこじらしてから医者に行き	同	電光石火きまるお手盛り	同
理髪師は年季を革砥の音に見せ	同	しんどかつたらどちた仲人嬉しがり 枚方市	草深 醉舛
社の不満忘れる酒と見てくれず	同	嫁とって賀状出すとこ急に増え	同
アッパレな妻よ師走も切り抜けた 鳥取市	近藤 昭夫	十二月詩人も金の欲しい月	同
お見合の感想服を脱ぎながら	同	深夜放送聞いて勉強はかどらず 貝塚市	護川 柏月
倅せになって便りが来なくなり	同	マスコミも愛称で書く人気者	同
容貌に自信があつてまだ嫁かず	同	さようならと別れたとたん寒くなり	同
案の定家賃もボーナスからあがり 石川県	高山 涼愛	忘れてた故郷の味はなんばきび 羽曳野市	板倉天悟空
産休をあわれ姑に使われて	同	解散で呑み当選で呑み議場で寝	同
十二月神父も寒い顔で来る	同	天井へ話題を外らす輪を吹かし	同
待ち人は来らず安い風邪をひき	同	裏切った女がもどる日を信じ 竹原市	山内 静水
叱つて笑うからききめなし 神戸市	波多野 美田起	薬屋のサービスサンブル添えて n	同
夢を賭け育児日記をつける日日	同	動けないベッドは ど の知恵を出し	同
貫禄をみせた飲みっぷり後で悔い	同	戦争へ老いて従う子をとられ 和歌山県	木下 一休
笑わさんという切った腹押え	同	天上に壁に響いて鳴る一時	同

かの如く盲信し、原句に背を向け
そっぽを向いた句評をして恥じな
い人もあるようであります、こ
れは全く道を誤った迷句評と申さ
なくてはなりません。

これを評者のひとりよがりとし
て片づけるには、あまりにもこと
が重大すぎはしますまいか。

これは誠に罪深い所業でありま
す。なぜなら、評者は頭から句主
を侮辱し、句主の作意の根源まで
も完全に破壊し抹殺し去つてしま
うからであります。

はてさて、ワ家計簿を見ぬかれ
そうなお茶を出し々の評は、かけ
値の無いところでA B C D いずれ
が正しいのでしょうか。

もしBでなくAであるなら、私
は男らしくあつさりカブトを脱ぐ
ことにしよう。

そして、私が長い年月いとおし
みつ育て上げて来た私のこの川
柳観に、それはいまの私にとって
とてもつらい悲しいことではある
が思い切つてメスを振るうことに
しよう。

そして川柳の意義と価値につい
て再考もし三考もしてみること
にしよう。

これは堪えがたきであるかも知
れない、がしかし、それは川柳に
生きんとする私にとっては当然落
んで甘受すべきことがらであり、



農繁期仮言で来てもらい	同	よそながら看護婦のスト案じられ	同
鳥影がさせばあの人来る障子	里田一十	浮かばれぬ遺骨車内へ忘れられ	同
追い抜いてくれと自家用おとなし	同	客の筋先ず丹前で隔てられ	見本 泉洋
陳列の菊が疲れた顔になり	同	丹前のまだ呑み足らぬ固い膝	同
安いところあるとさんざん歩かされ	外山 瓢人	賃上げの話題へ始業のベルが鳴り	同
倦怠期の打開策なりテレビ買う	同	代議士は違反でくす 故郷を立ち	高木 桃里
つけとどけせよとボーナス出る	同	平和主義赤字続きで気が尖り	同
政見放送みんな尤だ尤だ	河原みのる	顔よりは丸い心の嫁をつけ	同
六十のクラス会淡々と死を語り	同	クーボンの新婚旅行派手に発ち	山田 蛙水
何式にしましょうと月賦の葬屋	同	退職金握り世間が恐くなり	同
ボーナスの噂が淋しい小道具	樋口 寿栄	月掛の貯金そろそろ当にする	同
ゴルフ熱芝生が欲しいビルのひる	同	聖し夜を貧しきゆえの口げんか	常岡 孝風
ボーナスの三日は酒の中で生き	同	みかん売る八百屋産地も申し上げ	同
ネクタイの趣味を女がかえさせる	須藤 俊江	ふんいきにがんこな父もう出し	同
クリーニング屋で着かえて若さ	同	太陽族ばかりではない鍬を振る	木村 草人
へそくりを孫の單車に吸いとられ	同	お袋はわが家のぬしと云う姿	同
出るとこへ出ようと野暮	平田 実男	パチンコへ五黄の寅の意地が出る	同
ジングルベル 座敷丸く掃き	同	酒飲んで薬飲むのを忘れてた	横山 一声
証人で来ても警察恐いとこ	同	盛り皿のリングの傷を眼で調べ	同
マツチ箱みたいな家にテレビ置き	杉本 一鶴	膝小僧抱かえ休みのブラン練り	岩井 子甫

しかも前進へのよき踏み台となる
のかも知れないのだから。
(おわり)

勤勞の

句を望む

酒井ひか平

川柳に勤勞の句はなからうかと
探して見たが、これといった句が
見付からなかった。

不朽洞句帖から拾って十二句程
ほんとうの勤勞者の心境を詠まれ
た句は見付からなかった。

毎日新聞の女の気持欄には、よ
く素晴らしい、働く婦人のころ
が書き込まれてあるのに、どうし
たというのだろうか、最も身近か
な川柳に、案外といていい程生
活の句がない。

出勤の姿働蜂に似て

没食子
工場の門へ後姿が吸い込ま
れ 清生

三カ日またず油の作業服

湖山
タイムレコード打つ手生涯
働く手 蘭

等であつたと思う。

それにしても、何と淋しい事で
あろうか、働く、ことは、それ以
外のことよりも生活以外の事であ



尻理屈を酒の肴に聞いてやり	同	見てやってお代は要らぬ嫁の母	同
国思う心は同じストの列 下関市	藤田 雪峰	線香の一つもあげてくれと死に 宮崎市	野口卯之助
コーヒーをよばれ協力誓われ	同	今日もまた逢う約束の退社ベル	同
音させず食べるウドンで味がなし 西宮市	藤本 晴暉	集金をことわり菊を切ってくれ 笠岡市	守屋衣里子
ポーナスを狙う折込みバサリ落ち	同	売出しののほり気にせず定期にし	同
観光へ猿サービスの蚤を取り 愛媛県	村上 竹生	特価品ながらとにかく冬支度 和泉市	井阪東天紅
サイレンが中座をさせる様に鳴り	同	反抗期とはこうもあり 日 が続き	同
床柱家の歴史を秘める艶 松山市	沖原 光雄	唄うもの東京の街のウラばかり 伊丹市	小川静観堂
井の中の蛙機会へ取りすがり	同	ポーナスを貰うたその日忘年会	同
拍手してやれば三番まで唄い 兵庫県	遠山 可住	満員の中でも夢はかけめぐり 京都府	塚脇 笑太
十二月百円でつちり腹に泌み	同	十二月悪日悪日が続いて居	同
鬼瓦いかつい顔をして孤独 五条市	尾米 絵見	お茶と花下手でダンスは教師格 大阪市	藤富 淀月
自信過剰恋の階段ふみはずし	同	女湯のエブロン洗うすばしこさ	同
ジングルベルポーナス寄こ 宇都宮市	神田 豊年	社で出来た白髪二号が抜いてくれ 布施市	坂上山椒坊
全快の抜毛気にしている若さ	同	けちゃんぼと云われ財布を締めな い	同
カマヤリ に似たのが軍隊時代の自慢する 大阪市	北村弥次呂	牛の尻撫でてせり市待つばかり 岡山県	杉本たつよ
ボクシング猫がじやれてる と 打ち	同	借金へ留守もつかえぬ年の暮	同
派手好み地味な奥さん連れている 八尾市	吉内 青魚	大根引き身重の嫁も狩り出され 兵庫県	斎藤たけお
ネックレス貰うたが似合う服が ない	同	脱穀機ベルトが切れて煙草にし	同
サービスの口とは別に目がすこみ 大阪市	西本 保夫	高砂が少しも出ずに式がすみ 津賀県	土守 蜻蛉

ろうかと云いたくなるのである。川柳人が、いや川柳としては余りにも生活に直結するが故に句に作り難いと思われるのか、と反問したくなる程少ない。

珍玉の小品として新聞に受け入れられる女の気持、その投書家の大半は、真に生活の中から配るされた鉛筆の文章であるに違いない。勿論、投書家と思われるもする手腕家も無しとはいえないけれど、素朴な女の気持が、ひしひしと読者の胸をつく。

川柳だって、こうしたままなましい素材を擱んで適確な表現をなし得られぬのだろうかと思うのである。

勤労者階級と云われる大きな層が近代の中心として世代が回転する。

「麦飯を食え」と云ったとか、云わなかったとかで池田首相は身が細る思いをされたと伝えられるが、かくも大きな層を持つ素材の中から、川柳が生まれぬ筈はないと思うのである。

しかし、噛みしめれば句の大半は庶民の声であり職業の記録であるに違いない。

だが、これでは過去の川柳から抜け難い、真の働く、さまざまな姿がこころが反骨が、もつともっと近代的な色彩で露わに打ち出されてもいい。



ライバルがあつて生甲斐さえ覚え 悪びれず終着駅に來た邪恋 遺言の本命と信じ伯父の喪に 仕合せになつて女の指が荒れ 倅せな指で明日の米をとぎ 無駄買いは云わず包み紙利用賞 電氣器具揃つて聲が見つからず 名刺には前科五犯と書いてなく 母ちゃんは笑うてすます皿を割り あてられて居ますと姑のうれし ふる里の変らぬものは山と川 自家用車乗せて貰つて落着かず 退院と決まりあきれ程喋り 逃げ腰がうまい話へ腰を据え 咽ほとけのところで押えた買言葉 正札も月賦となれば高くなり 横這いのカニ麗人に認められ サーピスが悪いと酒の愚痴となり 値上りを知ったその夜の灯の暗さ 甲斐性が一票高く売りつける	同 高津 紡毛 同 井上美恵子 同 平野 光道 同 伊丹柳瓢子 同 谷 無閑 同 稲森けい女 同 鶴飼 鮎子 同 西浜 青路 同 井上 旭峯 同 福田 祥男 同 木村 太郎 同 並木東田楼 同 岡崎 祥月 同 渡辺 乱坊 同 小谷 仙山	同 焼酎の匂う課長と町で逢い 極道にも風呂の元栓しめる役 歯ぐき迄見せて儲けの高笑い 靴下が新らで階段ふみはずし 男つて弱虫酔つて戸を叩き 脛かじりそしてスキーで足を折り 祖父代々間借りの中をせまくさせ 再婚の友幸福という便り 座敷へ通れば銀行のカレンダー 霧閉気は顔に墨付くかるた会 上にながめつ奴の上にボス 日焼けした顔で議員の高笑い 懸賞だ籤だおまけだ歳の市 スタイルアップに妻のスタイル見当らず 旅の宿手持ち無沙汰に妻疲れ 到着の初荷へ商店生きてくる お友達もまいて共稼ぎ待ち合わせ ボーナスの記事読むだけの手工業 明日も休めぬ風邪へ卵酒 下足番多忙をかこつ人の死に	同 八尾市 神戸市 和泉市 香川縣 笠岡市 小松市 松江市 山形縣 愛媛縣 今治市 布衣市 愛媛縣 松本 大坂府 七尾市 河内長野市 鈴鹿市 津市 大坂市	同 樋口 一峯 同 吉田 博一 同 吉田 隆史 同 末田 晃康 同 三井 醉夢 同 谷本鈍愚坊 同 月田北海坊 同 岡崎 雪美 同 菊地 白葩 同 河本南牛史 同 越智 義夫 同 片山 光福 同 鳥井 川鳥 同 松本 忠三 同 橋本 裕邦 同 松高 秀峰 同 森本黒天子 同 吉田 俊和 同 嶋野ひろし 同 川口 弘村
--	---	---	--	--

車

福壽司

心齋橋筋大丸前

電話 三三四四番

この事は以前からも諸兄姉により、云い尽くされて居るものの、さて現実最近の句を拾つて見ると、この様に淋しいのである。

課題吟には佳句が続々と見受けられるように思われるのに、さて真打の雑吟となると物足りぬものがある。

路郎師のあの厳しい句をお手本に、練磨苦吟する川柳人こそ、最もそうした生活句が得意である筈と私は思うのである。

何時迄も、二号さんや、思い出を綴る川柳であつては進歩がない。

川柳人に今更ら此んな判り切つた事を云つては申し訳ないが、雑吟欄が幾分でも、そうした句で賑わい、勤労者階級の大きな支持を受ける迄の指導性を發揮して貰いたいと願うのである。

羽田を発つて

米・欧通信

足立春雄



フランクフルト

バーゼルから六時間汽車で国境を越えてフランクフルトに着く。

定められた宿に荷物を置いて街の見物に出掛けて見る。マイン河に沿った此の街はフランクフルト、アム・マイン（マインのはとりのフランクフルト）と呼ばれて居り、おなじみの哲人ゲーテの誕生の地であるので先ずゲーテの家を訪れて見た。屋根裏を入ると五階建の家で煙草の火で焦げあとだらけの書類机や、一九六〇年の今日迄の年月日、太陽、月の変化までを知る事の出来る仕掛になった時計や、御多聞に洩れずゲーテの肉筆とか肖像画がその家系の人々のものと並べて飾られていた。それらの内で何よりもゲーテの時代のすすけた台所が非常に興味を喚びた。

台所人問らしいすすけよう台所此所でゲーテも腹こやし

此の様子では食う悩みはゲーテになかったらしい、従って彼の哲学は左程暗いものではなかったのかも知れない。ゲーテの家を出てマイン河の方に足を向けると聖レオナルド寺院がある。これを前景にして遙かエレエムトールの尖塔を眺めると一つの写真風景が出来上る。しかも戦災の名残りが之に加わるので何とも云えない。

フランクフルトには其の他ゲーテ大学、動物園、植物園の名所があると云う事であるが、漸く黄昏の迫ったマイン河のはとりを、名も知らぬ教会を対岸に臨み乍ら逍遙する事に止めた。

ハイデルベルヒ

ハイデルベルヒの駅で荷物を預けて案内所に先ず立寄ると、あたかもL・Pレコードの録音の様に

乗るべき市電の番号を覚えてくると同時に某の金を払うと写真入りの案内書をくれた。その開巻第一行に曰くハイデルベルヒ「ロマンチックの町、ロマンティシズムの街」筆者が忙しい旅行にハイデルベルヒに一日の旅程を削いたその原因は、恐らく我がユングハイデルベルヒへの郷愁の然らしめた所である事は確かである。此所で敢えてアルトハイデルベルヒに対してユングと書いたのは、若い

時代の若きハイデルベルヒへの憧れを意味する為である。その昔天津乙女の華やかなりし宝塚で、高等学校時代の教科書で、ハイデルベルヒは多くの人達の思い出の街であるに違いない。その案内書の一部でもハイデルベルヒが世界の人達に親しまれるのは何故かと云う事について説明がしてある。

それはエルンスト・ビルディンブルグの言葉を以て置き換えられている。即ち「君初めてハイデルベルヒを訪れ給うかと問われる事あらば、我が生涯の初めより脳裏にいつしか秘められた此の景色は既に心眼に古く眺めしものに他ならず。心の奥底にあたかも大気の如く諸人の感知した所であると答える」としてある。また「ハイデルリンは「街そのものが夢の街である」と述べたとも書かれている。大学と古城の街、ネッカはケニーッヒシュトラールの山を巡って古めかしい橋の下を今も猶清らかに流れている。空の蒼さ、山の緑、古めかしい街の黄土色の建物は、

唯一人語る友もなく古びた昔の小路を辿るエトランジェに、確かに人の世の喜びと悲しみを感ぜさせないではおかぬ。その昔ゲルマン民族の血に燃える学生が、飲み且つ唄った「赤い牛」の中食の味と共に、永遠に心の夢を揺すぶってくれる思い出の街である。

古城に立ちて詩感なきを悲しむ

アルト・ハイデルベルグで若き日を思い出し
其所此所に夢の落ちてる古い街

ライン河

ハイデルベルグを午後の汽車で発つて七時頃にマインツに着いた。九時にならないと日の暮れないうちの地方も折柄の雨もよいに夕闇を思わしめる。マインツは人口十万そこそこ静かな街でラインを望むホテルの感じも良い。翌朝八時四十分にはライン下りの遊覧船に乗る。レストランの様なテ

ブルが甲板に並べたあり、船室といつても食堂が主で早い話が動く水上レストランと思えばよい。ラインの上には案内の地図を乗せて眺めていると、地図の上の数字と同じ立札が沿岸に立っており、今我々が下っている所が何処であるかがすぐ判る様になっている。やがて両側に迫ってくる山々には美しい葡萄園があり、ライン・ワインの本場である事を物語っている。此等の島の間に点々として村や

町の屋並が見え、小高い山上には古城が過去のラインの繁栄を静かに我々の胸に訴えている。ライン・ワインに喉を潤し乍ら之等の風物を眺めている間に、御承知のローレライの音楽が船中に流れ出す。ハインネの詩で有名なローレライは高さ百三十七米の巨岩が水面の右手に迫り、さなきだに速い水流は一層速く水深も深いらしく烈しい渦を巻いている。伝説の様に幾多の船人がその歌声に聞き惚れて命を落したというローレライの姿は、今求めんとしても此の岩の上にはなく、その中央は鉄道のトンネルが貫いている。過去のイメージは船の進行と共に徐々に薄れて、昼過ぎにはラインエック城で有名なコブレンツに着く。此所で船を捨て次の目的地デムマークへの飛行機に乗るべく再びデュセルドルフへ汽車の旅をつづけた。ライ

コーヒの味

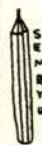
モダン 川柳

心齊橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい



繪と川柳で表現する歴史 (第12回)

戸田古方

(22) 国風文化

宗教が大切にされすぎ、僧侶がわがままになったので、

をきわめます。摂関政治がこれ、一族の女は多く宮中に入って、天皇をうみ、天皇は藤原氏のロボット化してしまい



それをさけるために都々京都にうつりました。これから平安時代がはじまります。22 23 図も平安時代です。22 図が文化の面から、23 図は政治、経済社会をあらわしました。

前時代に基礎を作った藤原氏はこの時代になって、全盛文化をうむのです。建築、彫

刻、絵画は勿論、文学の世界には仮名が発明されて、女流作家の活動はめざましいばかりです。

大陸にあったのとは少しちがった庭園なども美術の一部に加わり、日本独特の美しさの出来上った時代でありました。

中央の婦人は十二単衣は平安貴族であり、下の建物は宇治平等院の鳳凰堂でありまして、現存のこの建物は日本に残る文化遺産のうちでも、最も美しいものの一つでありまして、さきのすべての芸術的要素を綜合したものであります。

松に藤十二単衣と京の春
生き甲斐は屋敷屋敷に女の

日本の神々佛の名でよばれ
喰べさしてもらえばこそ
耽美主義

ン河に平行して走っている鉄道の車窓からは、時々ラインの流れを見る事が出来、遙かに山の上の古城や塔も眺められた。ボン、ケルンを経て、夕刻五時頃デュセルドルフの停車場の人となった。

絵の内の一人になってライン河

今も猶美女のいそうなローレイ
ローレイ今もラインに生きており

デュセルドルフから

コペンハーゲンへ

デュセルドルフはラインの右岸にある工業都市で、ドイツ産業の中心地ルールの中枢をなしている。首都ボンや古くからライン地方の学芸の都として知られているケルンとは隣り合せになっており、日本商社の駐在員も多いと云う事である。ホテルで夕食をとった後再びラインの河畔に出て見た。対岸には子供の遊園地があるらしく、それらしい色々の遊び道具が見えていた。丁度土曜の夕方であったので、両親に手を引かれた子供達の嬉しそうな顔が多く見られ、夫々対岸への足取りは軽やかである。

古びた市庁舎は十六世紀に出来たものと云われておりプラネタリウム、大きな田型の屋根の付近には、今度の旅行中どこでも見た事であるが、若いカップルの寄り添った散歩姿も少なくない。翌

朝コペンハーゲンへ向うべくSAの機上の人となったが、僅か一時間と一寸でデンマークに入った。飛行場は立派で、入国手続は至って簡単、税関は顔を見ただけでOKである。之が済むと自動的に扉があいて、コペンハーゲンの人となっていた。さあ此所まではスムーズに行つたのだが、宿となって困った事が出来た。予めコペンハーゲンは宿が少ないと聞いて来たが、一人位何とかなると思つて予約も別しておかなかつた所、ホテルは全部予約でないと駄目と云う事で、わざわざ駅の案内所迄出掛けて紹介されたのがバシヨン、先ず露宿は助かつた訳であるが、着いて見ると薄暗い屋根裏である。これでは学会の勉強どころではない。何時逃げ出そうかと云う事ばかりが気になる。それでも学会の三分の二位はどうしても居なければならぬ。困つた事である。特に部屋に手洗さえないといけないのだから、よく手を洗う癖のある筆者には全く耐え難いことであり、万一火事でもあったら先ず助かりつこはないと云う所である。ベッドも固くてこわごわしている。之では大きな期待を持って来たコペンハーゲンもさっぱりである。

之も経験と屋根裏の瘦せ我慢
屋根裏で見る月影の淋しそ
荷物並み 屋根裏で寝る五日間

(23) 律令制崩壊

大化の改新で大方針が定まり、つづく大宝律令でこまかい規則が定まりました。これを律令制度というのですが、実情ははじめからいくつもの例外がありました。公地公民とうたいながら、私地と私民が可成あり、時とともにふえてきたのです。班田収受にも差支えて来ましたので、新しい土地を開墾することがすめられました。政府の計画のように公地の増加にはなりません。その開墾地をもふくめて、すべての私地が荘園となったのです。

公地がきゆうくつになると、公民の生活は苦しくなり、私地への逃げ出し、すなわち、逃散がはじまりました。ますます、私地、荘園はふとってゆきます。国政は逆に苦しくなるのです。

律令制崩壊



又、藤原氏のわがままを怒る人々の力は上皇、法皇のうごきにむすびつき、院政がはじまります。平将門や藤原純友の乱もそのためです、

関取引田は豪族の手から手へ
腰掛のあとに天神さんが出

中央の藤原氏は自分達だけの安定した生活の上にだんだんいすわって、国政はほったらかし、地方はみだれほうだいとなってまいります。地方の荘園もその影響をうけますので、自然自衛の道が考えられ、武士が生れ、その武士のかしらとして源氏や平氏がでてきます。

地獄絵のどれが貴族のなれのはて

散逃へ五人組でも追いつかず

逃げ口もなく屋根裏にほりこまれ

コペンハーゲン

人口一七万のコペンハーゲンはデンマークの首都であるが、その人口は夏と冬で大変違いがある。と云うことである。デンマーク語で「商人の港」と云う意味を持つこの街の名前は、スカンジナビアの玄関口でもあり、バルト海の入口にも当る地勢からも当然な事である。しかし単なる港街には見る事の出来ぬ落ち着きのあるのは、クリスチャンボルグ宮と云う宮殿に王様が住んでいるからかも知れない。中央停車場のそばにある市庁舎は、非常に高い時計台を持つクラシックな建物で、我々の学会の開会式のレセプションが開かれた所でもある。近くには之とは全く別なアメリカ式のSAS高級建築があり、その他新しい建物も漸次建設されつつある様である。一般的に云って古い感じの街で、国立博物館、ノートルダム、ローゼンボルグ城、王公園、植物園等が名所として挙げられているし、一四七八年に創立されたと云う大学も街の自慢の一つである。港の傍には一六六二年に造られたという古い城跡があり、之は全く北海道の五稜郭に似ている。或は五稜郭が之をまねて造られたものであるかも知れないが、何れにしても、此の付近は実に散歩にもってこいの所で、五日間の滞在中二度もさまよって見た。有名な「人魚」のブロンズ像もここを抜け切

った突堤の近くの海の中にあるし、泉に面した女神ゲイオンの像も此の付近の緑の中に立っている。遠く此の海を航海する多くの船も見られて、屋根裏の住人にはこよなき慰めの地であった。王公園には童話の父アンデルセンの像もある。王宮と云っても全く簡素なもので、普通のビルディングと大差なく、唯熊の毛の帽子を冠った衛兵が一人ずつ入口に立っているのが違うのに過ぎない。中央停車場の前にはチボリーと云う大遊園地があり、映画、音楽、レストラン等ありとあらゆる遊び道具が揃っている。ルーレットの様なものもある。日本のお猿玉に似た「皿割り」もあると云った風で、子供は勿論沢山の老人共も楽しく遊んでいた。五月の初めから九月半までの観光シーズンにだけ開かれると云う事である。

学会のエキスカンションで一日郊外の古城フレデリクスボルグとクロンボルグを訪れた。クロンボルグは海に面した古城であり、かの有名なシェクスピアのハムレットの居城は之等をモデルにしたものだといわれ、此の城にまつわる伝説をシェクスピアがハムレットとして作り上げたといふ事である。

綿菓子も売っているチボリー
老人が日向ボックコに来るチボリー
シェクスピアの種も聞いているフレデリックス
古城これ侵略と略奪の血の歴史



★輝やく巨歩★ (6)

——創刊号から四百号まで——

昭和三十年

路郎主幹米子支部創立記念山陰川柳大会(三月六日皆生温泉友恭寮)へ出席。

女流作家訪問記 三月号から連載 丸尾潮花担当

路郎主幹夫妻篠山川柳大会(四月十日孔雀会館)へ出席。

路郎主幹食数支部川柳大会(五月二十二日歎竜寺)へ出席。

副主幹福田山雨楼逝く 六月十六日

川柳婦人友の会発足 六月二十一日 路郎主幹は川柳出雲支部三十周年記念山陰川柳大会(十月十四日出雲市公会堂)へ出席。

七月一日 山雨楼追悼号 九月一日発行

昭和三十一年 二月号から定価五十円に改正

不二田一夫入社。編集局へ

路郎主幹夫妻は四月八日篠山観櫻川柳句会へ出席。

路郎主幹夫妻は鳥取市復興記念

山陰川柳大会(五月十四日児童会館)へ出席。

川柳家の二十四時 六月号から連載。

山雨楼忌を修す 六月七日光明寺で。(以後省略)

関西短詩文学連盟誕生 六月二十四日初代理事長に本社麻生路郎主幹就任。

婦人友の会一周年記念川柳大会 八月二十六日光明寺で開催。(以後省略)

北川春華編集局長に就任 十月一日

路郎主幹は川柳出雲支部三十周年記念山陰川柳大会(十月十四日出雲市公会堂)へ出席。

不朽洞会理事会総会 十一月二十四日諏訪ノ森中島生々庵邸で開催。

不朽洞会役員改選 理事長に西尾榮、副理事長に川村好郎、若本多久志就任。

昭和三十三年 路郎主幹は鳥取市復興記念

路郎主幹は鳥取市復興記念

(二月二十四日)へ出席のため土井文蝶を帯同広島から下関の旅へ。

安川久留美氏逝く 二月二十日 川柳小松支部発足 三月一日

不朽洞会員合同句集「私達」発行 二月

「私達」出版記念の夕 三月十五日 大阪観光ホテルで開催。

路郎主幹川柳明和病院支部発足 記念川柳大会(三月二十四日)へ出席。

道明寺天満宮観桜吟行 四月十四日

ソ連の作家エレンブルグ氏来阪 四月二十六日「旅人」「川柳とは何か」「福壽草」「私達」を贈呈 古稀特集号 七月一日発行。六十八頁定価百円。

川柳川柳まつり路郎先生古稀祝賀川柳大会

(七月七日午後一時から藤田美術館で開催。)

全国の名物と川柳行脚 九月号から掲載。

水谷竹莊執筆。

路郎主幹北国川柳大会(九月八日金沢市北国新聞社)へ出席。

路郎主幹倒る 十月六日中脳血管梗塞のため。

昭和三十三年 中島生々庵副主幹に就任 一月

第一回短詩文学作品展。三月十四日から三日間大阪美術倶楽部で開催。(以後省略)

路郎主幹川柳備前支部創立十周年記念川柳大会(四月二十日牛神会館)へ出席。

私の作句法 四月号から掲載。

婦人友の会創立三周年百名突破記念川柳大会 五月十八日光明寺で開催。

五月号から定価六十円に改正。

不朽洞の人々 六月号から掲載

不朽洞会員バッジ制定

蛭子省二氏死去 八月十六日 須崎豆秋論 九月号から掲載

高鷲亜純氏執筆。

不朽洞会総会 十一月十六日金童閣で開催。

不朽洞会役員改選 理事長に土井文蝶、副理事長に川村好郎、西

いわを就任。

昭和三十四年 正本水客・黒川紫香・丸尾潮花

著川柳句集「三人」刊行祝賀川柳大会 一月十五日光明寺で開催。

ヒゲそり後に…

- 美容衛生剤G11
- アラントイン
- 水溶性ラノリン

配合

男性 200ml

ASAHI

本社句会場移転 三月から道頓堀文楽座別館四階へ。

宮田不二逝く 三月十九日 婦人友の会役員改選 理事長に山川阿茶就任。

路郎主幹夫妻殿下御成婚奉祝 篠山支部十周年記念川柳大会(四月十日孔雀会館)へ出席。

高沢一浪逝く 四月十一日 木下幽王逝く 七月三日

路郎主幹夫妻婦人友の会五周年祝賀句会(九月二十日諏訪ノ森中島生々庵邸)へ出席。

路郎主幹夫妻九月三日中島紫苑邸氏の無心庵を訪ねて奥信濃の旅へ。

勝谷山川兄逝く 九月十日

不朽洞理事会総会 十一月二十二日大成閣で開催。

本社句会場移転 忘年句会から日本橋北詰大阪観光ホテルへ。

日本橋北詰大阪観光ホテルへ。

昭和三十五年

一月号から定価七十円に改正
路郎主幹故川上日車翁終焉の地
を訪問 一月十五日

川柳夫婦壽哉 一月号から掲載
丸尾潮花担当

法と川柳で表現する歴史 一月
号から連載戸田古方執筆

前田佐健氏逝く 二月五日
前田雀郎氏逝く 二月十七日

本社句会場移転 四月句会から
難波高島屋西側末生会館四階へ

川柳川柳まつり郊外へ 五月十
五日宝塚旅行会館で開催

主なる執筆者

(あいうえお順)

あ 麻生路郎、麻生霞乃、阿達義
雄、青砥不二綱、(可明)、尼緑
之助、阿部閑生、阿部佐保蘭、麻
生梨里

い 今村荒男、石井柏亭、井上吉
次郎、井上剣花坊、井上信子、岩
崎柳路、伊藤夜叉郎、井上万三、

岩本素人、伊藤愚陀、石田汰夫、
岩垣日本村、池沢家居、石曾根民
郎、市場没食子、伊志田孝三郎、

池田可賀、石井白面人、井上湧三
飯降白雪、石川兼郎、石原青童乃
う 宇井無愁、海野夢一仏、梅本

秋の屋(嵐山)、上田翠光
え 額原退蔵、蛭子省二、榎田竹
林

お 小野十三郎、大西利夫、岡田
三面子、岡本一平、大島壽明、大

山竹二、小田夢路、大谷五花村、
大石文久、奥村丹路、大鶴喜由、

大島無冠王、沖野岩三郎、小畑自
由朗、大西野介、奥津啓一朗、尾
崎方正、大野風柳

か 川上三太郎、河盛安之介、加
茂正一、川村花夢、亀井花童子、
金井有為郎、笠原路生、川村好郎

川上日車、金子呑風
き 木村半文銭、菊川泰平榮、北
川春榮、菊沢小松園、木下幽王、

北村白眼子、紀二山、岸本水府
く 黒木鶴足、黒川紫香、国弘平
休

こ 小出樹重、幸田露伴、駒井美
の作、河野春三、近藤鈴子坊、小
林不浪人、小林若八、小山文三、

小西無鬼、後藤蝶五郎
さ 沢田四郎作、坂井久良岐、佐
々木三福、三条東洋樹、齊藤松窓

桜井六葉
し 島浦精二、柴谷幸二、庄万
よし、篠原春雨、品川陣居、清水

米花
す 末弘殿太郎、梶元紋太、住田
乱取、須崎立秋、鈴木青柳

せ 関本雅爾
た 田村孝之介、高安六郎、高尾

亮雄、種瓜平、竹内多聞、武笠山
椒、竹田芭蕉、高橋かほる、田中

辰二、大道鍋平朝臣、高峰柳児、
辰己藤風、竹内機見女、高須重三

味、高木角恋坊、高鷲重鈍、高沢
一浪、多田市多様、武部香林、高

田抱逸、武部若菜
つ 塚越迷亭
て 寺内信三、寺川信

と 島山一歩、富田狸通
な 長岡半太郎、中村直勝、中村

祐吉、永尾宋斤、長崎柳秀、中野
三尤、長浜晴浜、長野吉高、中島

鉄淵、長野文庫、中島生々庵、中
野懷窓、直江武骨、中島小石、中

島繁知郎
に 西原柳雨、西田紳榮、西島○
丸、西尾榮

ぬ 布部幸男
の 野村胡堂、延原句沙弥

は 林佐市、林敏夫、橋本縁雨、
花岡白樹、芳賀矢一、長谷川一徹

浜田久米雄、橋本言也、浜夢助、
速水真珠洞

ひ 東野大八、比企修
ふ 富士野鞍馬、藤里藤園、福田

山雨楼、古川風竹
ほ 堀口塊人
ま 正岡義、前田雀郎、松丘町二

前田伍健、正木竜建寺、正本水客
丸尾潮花、前山北海、松江梅里

み 三好草郎、水谷鮎美、三浦太
郎丸、水谷竹莊

む 村松夢裡、村田眉丈
も 望月信成、森東魚、森田一二

森田久、森下冬青、森脇幽吾里
や 安川久留美、山本雨迷、山川

花恋坊、揚半山、山路閑古、八木
摩太郎

よ 吉川亜人、横山巷頭子、吉岡
鳥平、吉田水車、米沢曉明、米本

貴志子
わ 細谷摩耶火、和田默然人、渡
辺均

主なる執筆者(表紙画・挿画)
小出樹重、岡本一平、田村孝之

介、富本憲吉、宮尾しげを、柴谷
柴舟、吉田きよし、吉岡鳥平、森

田ひさし、清水対岳坊、大西長三
郎、小寺鳩甫、三好計坊、小川武

朝賀大鱗、福富雷童、食満南北、
岩田清、種瓜平、由比種三郎、石

田兵太郎、米田三男之介、木村杏
園、池田正三、野尻弘、伊藤鯉魚

あとがき
○最初秩序のある年表にしたいと
着手したが、何とも果てしのない

膨大なものになりそうなので途中
から変更、かくもとりのためでない

抜萃に終ってしまつた。
○これは単に本社と本誌と、路郎

主幹を主にした表面的な歴史を記
したに過ぎない。これらの裏側に

は、雑詠を初めとして、本社と三
十有余の支部の毎月の句会の句が

踏々と流れて、川柳の偉大な歴史
を形造っているのである。

○本社句会も特別な企画のもの以
外は省略した。出席者数、選者名

その他の詳細を記せば各時代の特
長、変遷が良く判るのだが総て割

愛した。支部の創立廃止の消長も
詳しく書きたかつたが紙面の都合
で、創立句会に路郎主幹の出席さ
れた支部或は誌上で花々しく紹介
された支部のみに止めた。支部発
行の句会報の形態内容なども何一
つ触れ得なかつたが、川柳雑誌の

衛星的存在であるのだから後日、
何らかの形で、本社発行の刊行物
と共に紹介したいと思う。

○執筆者の総数も八百名を越えた
が、全員掲載することが出来ず約
半数にしほり、主なる執筆者に登
場を願つた。掲載順はほぼ執筆の
年代の順になっている。

○不朽洞会員、洞友、又は本社や
柳界に關係の深い計にも、心を配
つた。取捨は唯、紙面の都合によ
ることで片手落ちになつた点は深
くお詫びする。

○四百号という資料の中から、一
人でこつこつと抜萃したので、見
落した不備な点、札を失するところ
など多々あることと思うが、次
回の五百号でのより完全な年表へ
の足掛りとして御寛容願ければ幸
いである。(担当 橋高薫風子)

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤

リポニール (12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠





雑感雑話

後藤 梅志

車内で正月

元日の新聞を見ると、裏日本、北陸線のまわりは大吹雪で、積雪が二メートル三メートル。大混乱を呈した様だ。これというのも前夜から、大阪、東京方面からのスキー客、または妻子をひき連れただお国帰りのお客様でこった返したところへ、折柄、十六年ぶりの大風雪で汽車が止まり、二つちも三つちもいかなかったらしい。

元来こんなことになるのは雪国のならい毎年でもありそうなことだから、少し分別のある者なら、年末年始で襟を正して新しい歳を迎える時機に、新年で静寂にかえる我が家の周辺をよそにわざわざ草深い田舎に逃げこまなくとも良さそうなものだが、一寸先きの見えない人間のあさましさは放恣と欲望のまえにもろくも醜態をさらけ出してしまった。車内で新年を送る破目になるとは、なんとしても知恵のない話である。

人間というものは、物が欲しいと思えば手が動く。これが動物本能である。これを自然にまかして

おいては人の物を只取るようにもなるし、頭を張りたくるようにもなる。けれども高等動物の有難さは、めったに只他人のものは盗らないし、よくよくでなければ人を傷つけることもない。

ところが金銭(かね)というのが介在すると、事実かねで頭を張るようなことをやり出す。意識するとせざるに拘らず、かねであたたまを張るのである。何事も自由にできるとなると、即ちかねという介在物があると人間の徳性がマヒし、仕たいざんまいをやり出す。人間とは恐ろしい動物である。いまの若い人達の生活などは、いろいろなメーカにふところをねらわれていることを知りながら、テレビ、電気コタツ、セントラ機、ガス炊飯器などをどんどん買込む。こどもがおもちゃを叩きこわしても、子供はそうして育つものだと解釈して平気でいて、美を我が家に植えつけようなどという観念はすこしもない。何事も金さえあれば自由になるし、パッパと消費し、世はまさに暖衣飽食の時代というてよからう。ところが神様はだまって見ていらっしゃる

のである。この頃ひん繁におこる交通事故も、人殺しも、選挙違反も、見様によつては暖衣飽食時代の人間性の衰退を示す一景といつてもよい。

煉炭火鉢

最近おもしろいと感じたものは煉炭火鉢だ。煉炭火鉢というものは元来下の方から火になるのが通念であつた。だから煉炭をおこされと臭くてたまらない。亜硫酸ガスというのが室内にたちこめて頭がふらふらになったものだが、この頃売出している煉炭火鉢は、上から火をおこすようになっていて、はなはだ体裁もよい。お座敷へはどうかと思うが、茶の間や書斎なら火鉢のまわりに小皿や燭徳利を一寸のせて一ぱいやるような格(ふち)がついて仲々気が利いている。従来は煉炭はかんできただおこし台所の隅へなぞ置いたもので、この頃ははどうして畳の上へ堂々と乗り出してきた。価値も甚だ手軽で千円前後で色々な種類のものが炭屋の軒に並べてある。煉炭も夏場に買っておけば、十二穴のものなら一つ十二、三円。需要季に買ったとしても十五、六円らしい。しかも一つで十二時間はもち。電気ストーブや瓦斯ストーブより安く便利で危険がない。庶民が喜んで買求めるのも無理はなく、一寸した煉炭ブームであるが、これというの煉炭を上から火にするような装置にしたからに外ならない。茶の間で女房とこの火鉢をかこみながら断したことが、この火鉢をハツメイした人は随分儲けたことでしょうね」とときりに感心していた。私も合梯を打って感心したが、私にはべつに万感交々迫るものがあつた。

煉炭といえは三四十年来昔からあるもので、そんな長い間こんな簡単な原理を思ひがなかつたという不思議がその一つ。その次はこれを発明した頭(あたま)は、わたしのような頑迷固陋な老人級のあたまでなそうだ。という歯がゆさがその一つ。どうも二十(はたち)代の若い人の着想らしいと感じるふしがある。下のものを上にしたら、というこの簡単な着想が、老人達にはできそうもないのである。

天子の提灯

私はその頃まだ若かつた。時は明治四十四年春まだ浅いころであつたが、東京芝口の銀行に勤めていた私は、同じ銀行の芝支店(芝区新橋田町)の友達を訪ねた。どちらも二十歳には二、三年間まがあまり生意気ざかりである。この頃二重橋のまわりにえらい人が出る

神経痛・リウマチに...



オサドリン錠は西独クノール社が多年研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。その作用は確実で胃腸障害などの心配がありません。(10錠) 350円・(20錠) 650円

オサドリン錠

そうで行って見ようではないかという事になった。その頃東京中はみな和服で、私達も和服を着ていた。夕方になるとぶらぶら運動即ち「ぶら運」をやることになっていた。その頃新聞には、しきりに明治天皇のご重体が報ぜられ、世間もなんとなく異様な空気に包まれていたのであった。私の勤めていた銀行は黒い壁の土蔵造りで、恰度新橋駅に近い土橋（どばし）というのまん前にあって陛下のお通り筋にあたり、陛下の何んとかく厳密なうちに近頃とみにお艶のあたりが白いものを加えさせられたお顔にはきのうきょうの如く親しみを覚えていたものである。民衆の方へはおん目は投げられなかったが、その目は何物をも見通す如く、光りに満ち、平伏している徳大寺侍従長ならずとも、自ずと頭の下がるお顔であった。

「竜顔」ということばがそのまま当てはまるお顔で、いまの陛下のなんとなく中風でも出そうなお顔とは、大ぶんちがうのである。

新橋田町から日比谷公園までは五、六町。その日比谷公園をつき抜けて二重橋に行くには十二、三町の距離で、ぶら運には恰度手ごろであった。その頃私は俳句をたしなみ、その友達は音楽の道で、そのころ漸く一般に公開され出したオーケストラの話などを話しながら駒下駄の音もかろく、宮城前の広場へとさしかかった。ところがいつもと感じが少しちがうのである。電車通りのレール上にはた

くさん砂を置き、電車のきしる音もせず、高声で話す人もない。宮城のまわりは異様な静寂さに包まれている。近づくに従い、シャワシャワ、シャワ、シャワという聞きなれぬ遠波に似た音を聞いたが、これはたたくさんな人が踏みつける小砂利の音とわかった。うっかり踏込んで私達は、度胆をぬかれた形であったが、人波を掻き分けるように漸くして二重橋の前に立った。見ると、そこら一面はぎっしり人で埋まり、その数は二三千人と思われた。話しをする人は一人もなく、舌気な私達もまた無言であった。この異様な厳肅さは、天皇の赤子が必死の祈りの姿であったのだ。私達はただ茫然とやがて、お堀りの松の木を見上げる位置にある鉄柵のまわりに近づいた。するとそこにはいとも異様な風景が展開されていた。白装束の山伏ていの人。日蓮宗の僧侶。キリストの法衣をまとった伝導師たちまで、凡そ数十人の人達が一心に祈りをささげていた。その祈りは、本当に一心不乱であった。あたりに何物があるのも意識せず、或る者はリンリンと鉄鈴を振り、或る者は土に獅噛みつくようにして、朗々と響く必死の祈りの声はあたりの静寂を圧している。この光景を見て私は思わず胸震いがした。今までのひやかし半分の気持はどこかへし飛んで、十七歳の私は、何んとしたか兩無妙法蓮華経を唱えだした。心中の時はど俺は親不孝者だと思つたこととは。かくして、十分二十分三

十分と周囲の人々も口々に何やら黙祈をささげるままに人波は動こうとしなかったが、その人々を包む闇をへだてて二重橋寄りの石垣の上にボツカリ丸い提灯が浮び、それが高い松の梢の中で、こちらへ向ってゆれていた。恐らく羽織、袴の威儀を正した人の手にした提灯だったろう。この提灯の灯のいろは、今思い出しでも美しい、とても美しい灯のいろで、日本、の皇室というものを、染々感じさせる灯のいろだった。

その後私は、いくたびかこの内壕のまわりをあるくことがあったが、内壕の水上に無心に遊び戯れている白鳥の群れを見るにつけ、この時の提灯を忘れることが出来ない。これはニッポンという国柄の上に立った、一つの高きをもつ美しさであると思つた。

かくして国民必死の祈りの甲斐もなく、明治陛下ははば一週間ののち崩御あらせられたが、かかる英明の陛下でも死ぬる時には死ぬということを深く考えさせられたものである。

三橋美智也の 三味線

私は面白いことはなんでも芸術だと思つている。

実は正月の二日、朝から一杯やうって初春の気分で炬燵へごろり横になつていた。テレビは新春の番組で賑やかなものばかり、三十分ほどワットトとしていると、しきりに聞きなれぬ三味線の高い撥音に目が覚めた。私の好きな三橋美智也が三味線を弾いている。私は

美智也が三味線を弾くのは初めて見たのであるが実にうまい。三橋美智也は、民謡歌手とばかり思っていたが、三味線が実にうまい。私の一家は殆んどがミチアブアンだが、娘達から聞くと三橋美智也はもと三味線を弾きながらドサ廻りをしていたそう。

私は「誰い」をやっている関係で聴覚が非常に発達していて、色々な音をきき分ける。川柳などとも句箋を手にしていけると、鉛筆の文字が一つの響きを生じ、音を立てているかのような錯覚を起すことがある。少し病的かも知れないのである。

私は三橋美智也の三味線を聴いてこれは大した芸術であると思つた。

三味線というものは、長唄の大薩摩か、浄瑠璃の連れ弾きでもない限りは大い合の手に弾くものであるが、美智也の場合は、彼が民謡をうたうと同じ声が三味線で聴けるのである。即ち三味線を弾く手が民謡をうたっている。

むかし橋家橋之助という女芸人があって寄席で三味線の曲弾きをやり、茶碗であらうが何んであらうが、そこらにあるものはなんでも撥ちにし見事に本振ちと同じ音色を出し、やんやんと云わせたものだが、美智也もそれにすこしも劣らぬ腕前であるばかりでなく、私が最も打たれたのは、彼がその自ら弾く三味線の音の中に没入し、姿勢はすこしも動かない。びたっと座った姿は微動もせずそこからきびしい芸魂が発さんして



働く人の保健剤

B12の必須アミノ酸・9種のミネラル・12種のビタミン
これら29種の栄養を合理的に配合した新しい栄養剤です
だるい・疲れる・元気がない・こんな方にとにかくお試下さい

強力 **モリアミン** M

エムエム印



森下製薬株式会社
大阪・道修町
1000・1000円

いる。つまり他人の作曲したものを弾くものと、自ら作曲したものを弾くちがいが、そこにあった。

私はコタツから起き直ったままこちらまで微動もせず三味線の演奏がおわり、最後に彼がキザスキザスとかなんとか、いつて踊りまくる美智也ショウがすむまで、約三、四十分間座り通した。そして彼の芸術魂は大したものだと、改めてうなり直した次第である。

おもしろいものはなんでも芸術だと叫ぶ私の心境は、たとえそれが漫才であってもよろしく、エノケンの如く全くその芸道の中に没入し去るその一瞬にあるもので、決して玉石混じりはしないつもりである。

私はこの頃とみに人生が面白くなってきた。

竹馬

私はこの正月孫坊主に竹馬をこしらえてやった。ところが自転車には乗れるくせに竹馬は苦が平らしく放りっぱなしになっている。

昔は、男の子に竹馬は付きものであった。最初は一と節、次は二と節と練習をして、三節四節と段々背が高くなる。五節の竹馬に乗ると竹馬に乗ったまま、屋敷の雪が食べられる。まっ白い砂糖の味だ。

青竹の上にまたがって雪の上を走り廻る爽快さは都会の子には味わえない。

竹の節というものは面白いものだ。これを利用すれば立所におもしろい器物ができる。竹馬なぞもこの節を利用したものだ。自然

のものを生かしていろいろな生活物資を調えたり、面白いものを造る風習がすたれたのは、日本人の生活が或る意味で一步後退したことになるのだが、人間味の後退というところに誰れも気付く者がない。

また、竹の節は、観察すると一つづつの(間)になっていて、竹という植物体の、重要なポイントをなしていることが分かる。

この(間)と云うもの、をヤカ間しく云うようになったが、間というものは人間の呼吸に非常に関係のあるもので、間合いが計れるようになれば芸人でも一流人であろう。

呼吸を深く正しくすることに熟達しなれば(間)は計れるものではない。それを簡単に考えてやる大きなしくじりをする。

間というものは芸事ばかりではないように見受けるが、一つ試してみるとよろしい。例えば、頻繁に猛スピードの車が往來する国道のような道路を横断する場合。すこし呼吸を長くして待てば、ピタッと車の往來の止まる瞬間が来る。この頃は猛スピードを出す車などが走って来るから、目測だけでは危険の上もないが、実は悠々と渡れる瞬間がある。否その時機が来ると云ってよい。

但し一步踏出すのが遅れると、その(間)が過ぎ去ってしまう。自然はいつも呼吸しているものであって、要はその呼吸に合わせればよい。

至極簡単なようだが、これとて

仲々やさしいことでないのは、自転車には乗れても、竹馬には一寸乗れないという子供がある如くであるかも知れぬ。

おもしろいことは、夫婦ゲンカというものは、一つの(間)になっていることだ。

よく友人の家を訪ねると、歓迎してくれて何かシラケタ感じのすることがある。こんなときはきつと夫婦ゲンカをやったあとで、私が訪問したのがきつかけとなり、二階に上っていた妻君が下りてくる。笑い話のうちにケンカのおさらえをやり、やがておのろけが出たりしてあてられる。結局話し合ってみれば元々仲のいい夫婦。こんなとき私はいつも間というものを感ずる。ながい長い一生のうち、竹の節であり、間である。

(間)というものをしみじみ観察すると、そこいら中いたるところに転がっているようだ。

(三六・一・六)

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自叙の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月
- (49) 湯川銀界

(一) 湯川清彦 (二) 銀界 (三) 青言 (四) 伊丹市松崎五九の八

(五) 明治四十年五月十九日生 (六) 仙台 (七) 医師 (八) 伊丹 (078) 三三八〇 (九) 自画像を抜きたい俺に夜の患者 (一〇) 俳句、貝、切手の蒐集 (一一) 有 (一二) 昭和二十五年夏

(50) 関口文象

(一) 関口文蔵 (二) 文象 (三) 葵文台山人 (四) 東京都文京区戸崎町四五 (五) 明治三年九月三日 (六) 東京下谷 (七) なし (八) (921) 四七九四 (九) 赤とんぼ乾した布団のふくれ過ぎ (一〇) 極ったものなし (一一) A、なし B、昭和十九年五月金婚式を挙げ同年八月死別 C、父もとの孤独にかえる五十年。文象 (一二) 明治三十六年夏頃

(51) 国弘半休

(一) 国弘伍一 (二) 半休 (三) 哲山 (四) 山口県厚狭郡山陽町厚狭 (五) 明治三十九年八月十一日 (六) 山口県防府市西浦二八一番地 (七) 「国鉄」厚狭駅長 (八) 厚狭局四四番 (九) 子を叱る声を子なしに笑われる (一〇) 尺八(孤山流準師範) (一一) 有 (一二) 昭和十年頃

(52) 小宮山雅登

(一) 小宮山雅登 (二) 本名に同じ (三) 川上達二 (四) 長野県松本市新町一一一 (五) 大正六年十月三十日 (六) 長野県松本市西堀町二六七 (七) 工員 (八) 一 (九) 邪念なきまなこがめしを炊きいたり (一〇) 映画(洋画を好む) (一一) 有 (一二) 昭和十二年十月

(53) 清水汪夕

(一) 清水隆 (二) 清水汪夕 (三) (四) 岐阜市加納本町九丁目 (五) 大正十二年十月十六日 (六) 岐阜県大垣市 (七) 歯科医 (八) 岐阜五五六九 (九) わが指の天をさしたる記憶なし (一〇) 写真 (8ミリ) 国内郵便切手蒐集 (一一) 有 (一二) 昭和十六年頃

(54) 七里梯次

(一) 七里貞次 (二) 梯次 (三) (四) 長岡市表町二丁目九〇六 (五) 大正七年八月十六日 (六) 新津市駅前 (七) 機械工具商 (八) 四六六・二九四三 市外専用二四 (九) 鯉のほり下界は鰯焼く臭い (一〇) 麻雀 (一一) 有 (一二) 昭和二十四年四月

(担当・西川晃)



川柳雑誌社主催

新春川柳大会

会場 大阪観光ホテル・(一月八日)

御題が「若」なら、司会も若本多久志氏元氣あふれる名司会ぶりに会場も新春句会らしく、なごやかに、また快晴にも恵まれ暖かさが満堂にいっぱい。

あいさつに起られた中島生々庵副主幹は路郎先生の健康をまずよろこばれ、もうすぐ喜寿と金婚式が来ると、川柳王国のめでたさを晴れやかに語られた。

十二月句会「煙り」を路郎先生が披露され、十二月の不朽洞賞は老練後藤梅志氏の佳吟に輝く。

新選者として太田良子・魚住満潮・森下愛論諸氏が昇進された。

35年度全出席者の表彰式が行われ、

努力賞

傍島静馬君

あなたは昭和三十五年度に於ける川柳雑誌社主催の句会に全出席し斯道のため格別の精進をせられたること作家の龜鑑として推奨措く能わず茲にその努力を賞す

昭和三十六年一月八日

川柳雑誌社
主幹 麻生路郎

七年連続出席の静馬氏をはじめ、以下同文で文秋・多久志・一三夫・柳宏子・庸佑・旅風・す・む・舟遊・阿茶・薫風子・満秋・紫香・三司・圭井堂・敬也の十六氏が先生から努力賞を受けられた。

馬・高津敬也の三氏がのこった。そこで年間成績を調べると、天位6、地位3、人位5、平抜き62、計年周七十六句入選の、不二田一三夫氏が最高点となり、34年度につづき二年連続優勝が成った。



二年連続不朽洞賞獲得の不二田一三夫氏(す・む氏撮影)

昨年一月の不朽洞賞受賞者西尾架氏から西いわを・本多柳志・吉本善風・平沢保美・杉前南宗・高津敬也・丸尾潮花・不二田一三夫・今・四生屋・傍島静馬諸氏に、十二月の後藤梅志氏までの十二氏のうちから、優勝者が出るわけである。

昨年同様、出席奨励の意味から、まず全出席者が予選通過。不二田一三夫・傍島静

兼題「自由」

麻生路郎選

・圭井堂・与呂志・恒明・満潮・文秋・一三夫・尚史・太路・梅里・旅風・す・む・葉・小松園・敬也・敬太・露路・梨花・鴨汀・良子・東天紅・柳宏子・正一・阿茶・いさむ・静馬・晃・紡毛・六竜子・三司・満秋・多久志・万桑・舟遊・生々庵・竹莊・古方・大牙(靖真改め)・善風・進之助・いわを・奈良子・一栄・清子・句念坊・庸佑・松亭・雄声・八郎・瑞歩・柳志・形木・計・潮花・水京・メ女・夢虹・薫風子・繁雄・梅志・亜鈍・宏子・霞乃

兼題「日の出」

土井文蝶選

子の知性自由自在という喚け進之助叱られぬ自由が淋し一人っ児梨花娘の自由母は悲しく見つめてる本京けだもののような自由がのし歩き瑞歩下積み自由の世界眼について阿茶刑満期大阪中を走りたし満潮自由自由二階の自由は金がなし榮

離婚して自由になった退屈さ
自由にもならん札束よみつづけ
自由とはたのしきものよ退屈さ
女房のひもつきせれもうれしうて
我慢などするんじゃ無かつた自由の世
迷惑はかけつ放して自由主義
与えられた自由をまづに扱われ
ご自由はどうぞはいが金が要る
看護婦の自由にならぬ膳が来る
言論の自由恩師をつるしあげ
これが自由かと自由こわくなり
自由ナンダ全学連の泥靴よ
ものわかりよいが自由に染まぬ人
子を寝かせ自由になればもう十時
学問の自由へ恩師忘れられ
自由に便せと妻に渡したし
自由意志へカンパ疲れの額となり
自由奔放折り目折りはつけておき
出し入れが自由なために貯まらない
自由奔放流れを逆に行く若き
原稿にすると短い自由主義
別居してまでも自由になりたがり
不自由のない子がブロンキンを飲み
ご自由になさいと妻の瞳がいかり
三日の自由を無意味もてあまし
妻までが自由を叫びギョッときせ
自由になりなさいと二号は捨てられ

主井堂
鴨汀
小松園
客遊子
圭井堂
舟遊
讀子
潮花

日の出でつせとお燭をさいそくし
齒ヲシを日の出の庭へもって出る
日の出などみたこともなし記者稼業
若水を決めば初日が顔を出し
日の出から初荷の声の威勢よく
初日の出今年には雨にはばまれて
その日の出二見泊りは雨となり
日の出には縁がない僕バスに乗り
山頂で勝手もちがう初日の出
夜通しで初日の出見る伊勢の旅
初日の出みんなの顔も染りそう
犯人の眼にも日の出は美しい
初日の出拝んだように年賀状
日の出待つ街はちほちと活気づく
初日の出おがむ頃には酔いつぶれ
太陽が登って宿へ引きかえし
新婚の二人に日の出まばゆすぎ
開運の絵馬金色に初日の出
日の出の美しき網を引く手を休め
絵のような日の出ならぬ夫婦岩
お米光輝む夫婦でない二人
初日の出鶴飛びそうな雲になり
遙拝へ冬の日の出は位置を変え
てれくさし初日新居をのぞきこみ
日の出眩し宿直明けの窓
夜を稼ぐ職で日の出に親しめず
金儲け日の出を待たず動き出し

子がなくて白髪子があっても白髪
白髪バサバサ詩人の癖は指でよし
詩に遠く鼻の白髪を二本抜く
血圧は気にせず白髪艶があり
短かめに刈らせて白髪気にしだし
美しく老いて白髪ゆたかなり
白髪多くなってもあわてる癖があり
白髪には弱い女の性を見せ
白髪など厄年ねぎらわれ
白髪とも言うておれない数になり
白髪一つ合わせ鏡のふたをあけ
白髪ある医者が信頼感があり
パトロン的大事にしておく白髪
初釜の母に目立って来た白髪
白髪増えて夫婦喧嘩の種もなし
初恋も白髪になって居た故郷
一幕を残して帰るとも白髪
臨終の白髪が目立つばかりなり
印象を今度は白髪はめて書き
かこつ白髪を貫録などといわれ

福引の魅力へよいいな物を買
福引きのつもりでお見合家を出る
空くじもそれ新橋笑いこけ
福引きの特賞だけは派手に書き
福引きへ消費景気を沸きたたせ
福引の一等きりぎりまで残し
福引へさしずめ要らぬものも買
福引にブラジャーあたる独り者
空クジは無いぞとタワシ笑つて
福引きで二等を当てた妻の息
福引きで今年の運を試して米
福引へ子の幸運を信じとり
福引のタンスが届く大晦日
福引所一等が出た声になり
福引の文句へ幹事知恵しほ
福引のザルを冠つた子がかえり
出ない筈まだ特等は此処にあり
万一の夢ころがった玉へ消え
福引の戎さんには縁がなく
福引は子供にまかせ買ひあさり
福引に当った顔の揃うバス
福引の当ったマイクつた抜ける
福引で新春の社務所は抜け目なし
歯磨でハワイへ行ける夢を買
福引で来た温泉のぬるいこと
福引へ当るもんかとかきまわし

川柳雑誌社特製
投句に
通信に
柳
箋
一冊(五〇枚綴) 三〇円
送料(一冊分) 八円

兼題「白髪」 西尾 栗選

入院が白髪にするまでに癒え
白髪抜き合うて愛憎口にせず
若づくり増える白髪に追い付けず
貫録が出来て白髪は苦にしてず
共白髪うなずくだけのいい夫婦
白髪一本抜くに頭をあずけられ
一本の白髪へ女気が弱り
Y談も横綱紙と言う白髪

入院が白髪にするまでに癒え
白髪抜き合うて愛憎口にせず
若づくり増える白髪に追い付けず
貫録が出来て白髪は苦にしてず
共白髪うなずくだけのいい夫婦
白髪一本抜くに頭をあずけられ
一本の白髪へ女気が弱り
Y談も横綱紙と言う白髪

入院が白髪にするまでに癒え
白髪抜き合うて愛憎口にせず
若づくり増える白髪に追い付けず
貫録が出来て白髪は苦にしてず
共白髪うなずくだけのいい夫婦
白髪一本抜くに頭をあずけられ
一本の白髪へ女気が弱り
Y談も横綱紙と言う白髪

入院が白髪にするまでに癒え
白髪抜き合うて愛憎口にせず
若づくり増える白髪に追い付けず
貫録が出来て白髪は苦にしてず
共白髪うなずくだけのいい夫婦
白髪一本抜くに頭をあずけられ
一本の白髪へ女気が弱り
Y談も横綱紙と言う白髪

兼題「福引き」 松江梅里選

福引きのルノーは飾るだけでよし
一等が未だ残ってる大晦日
五等ばかり出る福引きに腹をたて
十万円当てたマイクはよその人
勢が過ぎながら福引器空回り
馬鹿にしながら福引にあるスリル
福引で当った人を読んだだけ
福引で特級酒でも当てる来い
福引の福券揃って主婦の夢
福引券いらぬときつう値切られる
よりみちのできぬ福引きさされ
特質で当ったような今の妻
マッタタッは他人がもうなり
福引きの粗品をバーへ忘れて米
特質のテレビ背中の児に当り

福引きのルノーは飾るだけでよし
一等が未だ残ってる大晦日
五等ばかり出る福引きに腹をたて
十万円当てたマイクはよその人
勢が過ぎながら福引器空回り
馬鹿にしながら福引にあるスリル
福引で当った人を読んだだけ
福引で特級酒でも当てる来い
福引の福券揃って主婦の夢
福引券いらぬときつう値切られる
よりみちのできぬ福引きさされ
特質で当ったような今の妻
マッタタッは他人がもうなり
福引きの粗品をバーへ忘れて米
特質のテレビ背中の児に当り

福引きのルノーは飾るだけでよし
一等が未だ残ってる大晦日
五等ばかり出る福引きに腹をたて
十万円当てたマイクはよその人
勢が過ぎながら福引器空回り
馬鹿にしながら福引にあるスリル
福引で当った人を読んだだけ
福引で特級酒でも当てる来い
福引の福券揃って主婦の夢
福引券いらぬときつう値切られる
よりみちのできぬ福引きさされ
特質で当ったような今の妻
マッタタッは他人がもうなり
福引きの粗品をバーへ忘れて米
特質のテレビ背中の児に当り

席題「強引」 菊沢小松園選

強引な意見が若きはねつける
強引に振切つて来た夜の眠れず
強引に飲ましておいてあと始末
強引に似ぬ強引な子に出抜かれ
強引に飲んでチップも置かず去に
強引に貰った嫁は弱手なり
店員の強引に負けた紙包み
強引にねばってとうとう借つて
買うてやるまで玩具屋の前で泣き

強引な意見が若きはねつける
強引に振切つて来た夜の眠れず
強引に飲ましておいてあと始末
強引に似ぬ強引な子に出抜かれ
強引に飲んでチップも置かず去に
強引に貰った嫁は弱手なり
店員の強引に負けた紙包み
強引にねばってとうとう借つて
買うてやるまで玩具屋の前で泣き

席題「札ひら」 金泉万葉選

札ひらをきるにも如才ない男
折角の札ひら折目のつかぬ札
おもわくのある札ひらと知って受け
札ひらも事と場合で切りまっせ
貸しますと子が札ひらのお年玉
札ひらへその年の女寄つて来る
札ひらへうっかりお辞儀してしま
札ひらを切る手の細い細い事
札ひらではおを叩いて春うらら
札ひらへ女良心たしかめる
なんのこたか札ひらを切つて見せ

この煙り産業日本を負う煙り
病む母へ月手夕餉煙らせて
ライバルを煙にまいて逢いに行き
がめつさは煙りになるの忘れおり
末席をけがし煙りを吐いただけ
醉生夢死我が人生の煙りに似
香煙讎々命惜しめというごとし
望楼は煙も見えずうたになり
枯葉炙く煙りの中の清掃婦
埋立地煙りは土方居るところ
三筋立つ煙浅間は唄になり
抽籤の団地焼場の煙り見え
煙るはず四人が四人共に喫い
反魂香僕にもほしい過去をもち
炭焼の煙りが見えて冬になり
なんの煙りかしら婦長の目が笑い

紫雄
八九寸
山椒粉
瑞歩
威雀
七面山
蕙風子
柳志
大丘子
白柳
梅里
生薑
三司
狂二
花美
一鶴

煤煙の下で、靈長共が生き
 手をかざす方へ方へと来る煙り
 雨上り炊煙なびかせて舟に住む
 煙かとまごう夜霧の気味悪く
 黒煙りやつと勞使が手を握り
 一隅にルンペン寄っている煙り
 大阪に育ち煙に不感症
 新生とピースのけむりストが解け
 スピードアップこたえは煙りもう吐かず
 一すじの煙り嬉しい小工場
 骨拾ひ白い煙りがまだ残り
 たなびけば煙も春の空のもの
 煙になつて消える話は面白し
 斗病へもくもく生きている煙
 紫煙しばらく考へる人であり
 煙り輪に吹いてうを言うことに馴れ
 人を焼く煙と知らずクレヨン画
 出稽古も工場の煙りくるところ
 (書估清記) 梅志

大阪府北区 木幡町 5-5-4 電話(34)5231 振替 大阪6702番

食品と科学社

一路集



値上り

土井文蝶選

値上りの当座チップをやらずおき 弘村
釣銭の不足を聞けば値上りし 千甫
値上りもどく吹く風の百貨店 恵甫
市場籠めて十円 値上りし 美山起
値上りが又主婦連をあわてさせ 花美
値上りと知らず小銭を握って出 祥月
デザインをかえて値上げの札を張り 雪美
あがりまつせあがりまつせと元りあり みのる
値上りにテレビに変わる牛を売り たけお
ポーナスの夢へ値上り先に来る 隆史
値上りで虎刈りされる子 沢山 一峯
質銀の値上げしびれが切れたスト 卯之助
火葬料の値上りうかつにも死ねず 一鶴

値上りのしわ寄せ夫へやって来る 保夫
値上りもない俵米の土に生き 弘道
宿買も値上げホテルと名が変わり 鶴汀
値上げしてから上客になる飲み屋 鶴汀
値上りを待つ間へ草の根をおろし 可住
当選御礼待ってたように値上論 静水
休業して絵符書きかえる二割上げ 定月
理髪屋で値上り分を借りて来る 圭井堂
鼻声で二号値上げをはのめかし 圭井堂
値上りをラジオで聞いて株愉し 蜻蛉
倍増論ぶって値上りには触れず 繁太郎
値上りを母は明治とすぐ比べ 八九寸
値上りへ妻もその気になって来る 秀峰
値上りへ売手も政治くさしとき 和二郎
バス通るだけで値上りしてしま 笑太
値上りの裏で資本家を引き 井蛙
坪万を夢見て気長に馬を飼 井蛙
値上りをたのみ虎の子株にする 紡毛
値上りで儲けた豚に病みつけれ 藤波
値上りを知らで湯末の店は売り 藤波
値上りの分だけ長く湯に浸り 竜蔵
値上りに給料袋息が切れ 徹也
倍増論出せば値上げが先に来る 豊年
値上りを知りつつ酒はやめられず 酔夢
値上りを女房に聞かす相場欄 北海坊
小売屋も値上げの愚知を云うて売り 実男
値上りしまつせとタタキ恩にきせ 東天紅
値上りへどっと出荷の山が出来 白葩
次点になったで俺も値が上り 鈍愚坊
値上りのない資本金株子がわらい 淀月
ストやんでから野線が急に伸び 淀月
豚値上げカツの衣が厚うなり 山椒坊

値上りへ風呂も遠慮の子 沢山 光福
値上りにお辞儀を一つお負けする 涼人
値上りのためかおかずが塩辛い 光道
またまたサラリー物価のあとを追 どんたく
値上りのデータを組合ならべて どんたく
月給が亀なら物価は兎なり 初甫
店員は値上げになったとも云わず 初甫
噂もう温泉が出る土地の値が上り 光郎
卵の値上がった途端鶏毛変えをし 忠三
値上りで家計代ろと居直られ 端歩
値上りが小鳥の餌にまでひびき 十九平
官営が値上げの手本先す 示し 愛鳩
値上りの量りの針に眼をすえる 蛙水
歳費値上げには異議なし超党派 ひろし
値上りへベータアップは後手を行き 竹生
病院まで値上げのストが流行り出し 生薑
値上りをどく吹く風と二号邸 旭峯
値上りに仕立直しを着ると決め 無閑
値上りでももう追つかぬ手内職 代仕男
値上りへ池田景気のカブト町 草々
ストックへ北更笑る値が上り 古心
値上りを待つ間の土地を遊ばせる 雪峰
値上りも待てず端株で損をする 雄水
値上りの後で買わねばならぬ破目 圭水
小遣も値上げてやとおどかさ 白溪子
値上りへ近所同士の気が揃い 文庫
売った株くやしがるで値が上り 恵二朗
明日から値上げでつせと御用聞き ひか平
一票が期待外れの物価高 孝風

値上げせぬ増家お経を控えられ 圭井堂
売つくしたとこへ値上げの荷がどき 雪炎

愛称

水谷竹莊選

愛称で呼んで旧知は情が湧き 弘村
愛称に親しみのあるクラス会 雪美
愛称で呼べない程に伸し上り 藤波
愛称で紹介される酒の席 竜蔵
愛称でよんで呼ばれてクラス会 みのる

天

値上りが豚の寿命を短かくし 実男

散髪店の値上げへ三日程の意地 宗太郎

軸

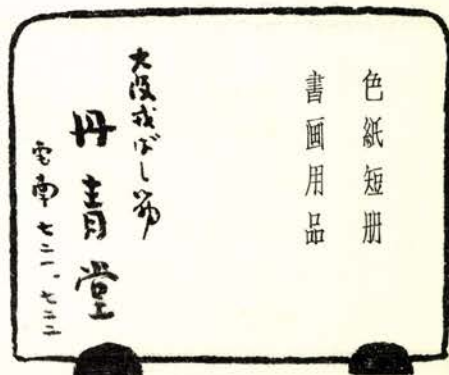
値上りに一万円が軽う消え 文蝶

人

値上りを製造元のせいにする 市佑
値上りの空気をマスコット見逃さず 圭水

地

値上りの値札は店を閉めて替え 東天紅



愛称で呼び刺期の仲であり敬也
無礼講社長愛称攻めにあい井蛙
愛称で呼んで姑の氣に入らず可住
愛称で呼んで末っ子甘やかしか花美
愛称になれて本名忘れかけ笑人
愛称の弥次へ舞台に湧く人氣和三郎
愛称へ氣さくに返事して五十同
小学校の頃の愛称まだ続き蜻蛉
同級生集れば愛称若返り繁太郎
開典に愛称も出て第一位八九寸
愛称で通り名前も知らぬ仲秀峰
ナースンで通りバーでは顔がきき
大統領と呼ばれ寛美はほけて見せ
愛称で呼ばれた方がピンと来る初甫
愛称でスターを呼んで親しもう光郎
愛称で呼ばれて老師顔くずしどんたく
兵たりし日の愛称で訪ね来る光道
子供にも通じる愛称で親しまれ東天紅
愛称と似ても似つかぬ出世をし錢悪坊
愛称で呼ばれて高い勘定書淀月
愛称で呼ばれて嫁ぐはやりつ妓凉人
愛称がおまえに愛り倦怠期醉夢
職場での愛称奥さんまごつかせ豊年
愛称のつかぬ男で親しめず庸佑
愛称の名をそのままに紺のれん卯之助
愛称で呼んで社長が打とける保夫
披露宴愛称の盃派手になり隆史
愛称で呼ばれ戸惑う連れがあり千甫
愛称で掛ける電話に甘い声恵甫
愛称に応える顔もほころびる雪峰
愛称で呼ばれ御得意顔えてくる草々
愛称で甘いレーター届けられ代仕男

愛称を思い出せない程に老い無閑
子供から愛称で呼ばれ苦笑するひろし
愛称で幼馴染がよんでくれ愛鳩
愛人に付けた愛称姉は知り蛙木
愛称で子供にまでも親しまれ旭峯
愛称のつもりが相手のカニに触れ古心
愛称で上役呼べる仲であり圭水
色街で通る愛称もち合わせ白溪子
愛称のなるほどつかむところかみ恵二朗

愛称で呼ばれクラスの人氣者孝風
愛称のままに御降嫁あそばされ恵二朗
募集した愛称つけて汽車が免ち白溪子
愛称のままの屋号でよくはやり文庫
先生に全部愛称付けており雄水
愛称でマダムに呼ばれる程通い実男
腹名をまだ愛称でししたまれ宗太郎
愛称がバーと会社でまた違い山根坊
愛称でうまくつかんだ人のくせ光福
愛称で綴る弔辞に泣かされる圭井堂

愛称で甘えて貰うお小使ひか平
自己紹介わが愛称も言い添える十九平
天
愛称で指名をされた隠し芸生薔
軸
投げテープ愛称で呼ぶカブリツキ

足音

石川侃流洞選

足音に慌てて出れば押し売り屑秀峰
足音は玄関口で酔っている雪美
足音は又行過ぎた夜を編み和三郎
足音を目顔で制す寝入りばな圭井堂
真夜中の足音それてはとする白苑
足音が絶えて夜鳴き火を落し十九平
足音はたしかに聞いた同居人蜻蛉
足音へ氣付かぬうれい日の機嫌豊年
足音がつれて犬に吠えつかれ旭峯
足音をしのげば寝ている子に土産醉夢
殺しても足音秘密を知っている隆史
足音を消しても包囲の輪をせばめ山根坊
足音へ大寝をそって油断せず井蛙
足音へ話題を交える目を合わせ雪峰
足音を殺せばねだがまたきしみ雄水
足音へ聞えるようにセキばらい北海坊
足音で悪い知らせが適中し干甫
足音は隣りに氣兼ねして忍び古心
ゴマすって帰る足音あやしまれ初甫
足音を忍んだつもりが母の声紡毛
コッソリコッソリ更けて義足の淋しけれ
無気味さは自分の足音だけ聞え実男
励ましに来た足音がいらだたせ宗太郎
足音をさせずおどかさ背に廻り花美
足音が凍りつくよな寒の月代仕男
足音へ勉強部屋が落ちつけず美由起
こういえばこう足音へ吐が出来文庫
足音が酔うてゐるらしいで避ける十九平
いつかしら穴とわかる足の音豊年
足音は蟻にもあろう蟻が知り光郎
抜き足と差し足はバツリ顔が会い恵二朗
足音の方へ赤ちゃん首をまげ卯之助

殺しても足音秘密を知っている隆史
足音がビタリと止んで氣をもませ無閑
狸寝の耳へおかししい忍び足八九寸
派手な音たてて宿直巡視する庸佑
足音の嬉しさ逢いに行くリズム義夫
サクサクと足音響く初詣り蛙木
足音で何かあったと記者の勘圭水
金持った足音は靴が鳴りひか平
足音を高く立てるもエチケット同

人
愛称で呼ばれバタ幕明くベルが鳴り生薔
地
おどり込むような足音当り簾恵二朗
天
足音が消えれば母親もう案じ圭水
軸
足音もさまたま駅の十二月侃流洞

品質優良

タチカワペン

TACHIKAWA PEN

タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画紙

大阪市東区常盤町一丁目十二番地
立川ペン先株式会社

柳界展望

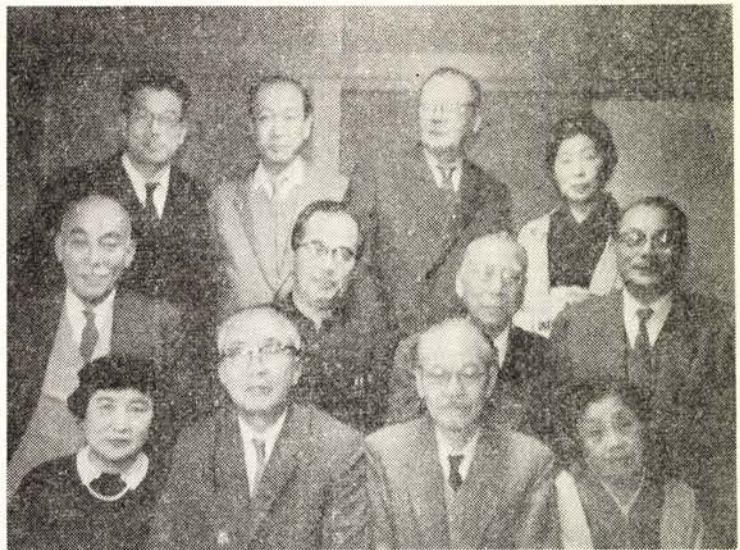
句会

▼本社三月句会は七日午後二時から五階会議室で開催。

(火) 午後六時から日一月二十六日(木) 午後六時から、難波城和クラブで開催。

入る大阪神光寺で開催、柳友お話しの上多数出席された。

▼南区医師会文化部杏林新年川柳句会は一、二十四日(火) 午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科



杏林柳柳忘年句会——当日、川柳雑誌社へ露郎先生を訪ねられた、ハワイの前山北海氏をゲストに迎え、十二月廿七日夜に料亭露六で杏林柳柳忘年句会が開催された。
写真説明——前列左から山川阿茶・前山北海・森生路郎・森生義典・中列左から福井野路・中島生々庵・中田一樹・河村瑞典・後列左から平尾八希彦

開催。▼岡山電報局ゆめ川柳忘

年句会は十二月十七日法院居で開催。

▼川柳雑誌支那新年句会は一、八日(日)いづみ園で開催、食吉市から鴨鴨、乱坊氏らが出席され極めて盛会であった。

▼「川柳平安」創刊五十号記念誌上競詠大会投句は、四月号発表分、課題

「日本」夢二郎選、「注目」六葉選、「人生五十」生々庵選、「委

す」東洋樹選は二月十五日迄に五月号発表分課題「仮説」「味噌」

「鏡」「晴れる」は三月十五日迄に各題別記にして三句以内、地名

姓男明記の上京都市中京区内夷川通島丸西入平安川柳社誌上競詠大会係宛。

▼時の川柳五十号記念川柳大会は二月十二日(日)正午から神戸市立産業会館(省線神戸駅下車北二丁)で開催、兼題

「陽気」「やわ肌」「親バカ」前

途「開運」席題三題当日発表、各題三句以内、会費百円、投句は

神戸市兵庫区神田町七九時の川柳同好会宛。

▼川柳出雲支部では一月廿五日に逢山荘で句会開催、新春の意気込みをあふりたいとの

こと。▼電電川柳会二月句会は十八日午後一時から熊本通信病院

三階会議室で開催兼題「耐える」

「靴」各題五句。▼建部川柳社

(岡山県) 二月句会は十八日午後七時から建部小学校で開催。兼題

「やっかい」「寝ごと」「巡視」

「役員」▼川柳下関支部は一、十五日午後二時から下関鉄道職員

会館で開催、山口から蘇人氏、厚狭から半休氏等盛会であった。

▼東京観光川柳研究会の二月句会は十二日午後一時から港区芝

新橋六ノ六伊藤藤路天居で開催、兼題「企画」「ビル街」「炬燵」

各題三句。▼しなの川柳社二月句会

は十八日午後七時から新伊勢町三枝葉店楼上で開催、兼題

「詩」「運」

新刊柳書・句集

▼東野大八著「風流人間横丁」昭和三十五年十一月十八日川柳雑誌社から発行された。昭和二十八年

五月から川柳雑誌に連載された著者の隨筆、柳論集で、一気に読ませる魅力はジャーナリストとしての著者の面目がうかがえる。好著

四六版二百六十頁、定価二百五十

円。▼前田雀郎文庫目録が、昭和三十五年十一月一日栃木県立図書館から発行された。同文庫の図

書二千冊余、川柳の雑誌百二十三種、原稿その他七十数種を収録したもので、文学書のみならず、哲

学、歴史、工学、語学等の広範開の書にまで及んでいる。

▼川柳噴煙、臨時増刊、川柳作品集「草千里」が、昭和三十五年十二月十

五日川柳噴煙社から発行され

た。同社創立十周年の記念事業の一環としての句集で、自選句十章

からなる作品集、随想、評論などバラエティに富んでいる。四六版

百六十六頁、定価二百五十円。

▼高橋蟬蛇著、古稀記念「蟬蛇句集」が昭和三十五年十二月二十五日発行された。川柳を始めて、四年間の句の集大成で、旅、酒、女の句が多い。四六版、二百八頁、非売品。

消息

▼露郎主幹は十二月二十五日、退院後自宅療養中の須崎豆秋氏を見舞われ、一日も早い再起激励を寄せられた。

▼東野大八氏(美濃加茂市)から、「私の本が着きました。一冊をとり出して手にのせたと

ときも、自分の書いた本だという実感がピンと来ません。みなさんに読んで頂きたいと思う反面、一冊残らず仏壇の奥へでもしまひ込んで誰の眼にもふれないようにして置きたいという気もします。」

と感慨を寄信された。▼尼縁之助氏(出雲市)から、松過ぎて二十日というのに珍らしく十センチ位の積雪を見られた由。

▼高鷲亜純氏(大阪市)から、「東野大八著「人間横丁」を忘年句会で購い

求めました。一気に読破。満州、支那を舞台に、豊富な主題で完全

に魅了されてしまいました。不羈

奔放な筆の迂りぐわいは支人の巧緻、「哀妻物語」の文章構成は長篇小説の片鱗を立派にまじり、上海ものの数々にも「商埠地の少女」を最高調に、適宜、自分の隻手を語る非凡な腕前に驚いて「す」とすこぶるの好評を寄せられた。

▼戸倉普天氏(兵)

庫里)は昨夏米、胃腸傷害で食欲不振相当衰弱されていたが、専門医師の診断を受け、静養加療の結果元氣回復、現在では元通りの暗れやかな身体に戻られたと。

▼若本多久志氏(西)

宮市)夫妻はお正月を白浜温泉で過ぎ、「まだ苦いつもりアベックで湯につかり」の句信を寄せられた。

▼清水白柳氏(大阪府)

は一月十二日所用のため大雪の北陸路へ赴かれ、小松市の伊藤茶仏氏に会われた。

「短靴で動きのとれぬ雪解

道」▼木村水堂氏(大阪

市)はリウマチ性湿性関節炎で、足の痛みが激しく

年末多忙の時期に歩行困難で難渋されて居られる由。

▼松江梅里氏(大阪市)の店「大万」では、

大阪弁番附手拭を別染にして、顧客へ配られたが、因みに東方横綱には、「がしんたれ」西方横綱に

は「えげつない」などがある。

▼渡辺乱坊氏(倉吉市)は一月八

日川舞鳥取支部句会に出席、八歩

・日満・若人、其の他の柳人諸氏

と交歓された。

▼杉本一鶴氏

(目塚市)は手術後の肺機能低下

がわざわざいして、毎夜半すぎ喘息



西館川柳社主催の川柳展

関係で思い悩んで川柳の出来ない

時は励まし、川柳塔への投句の前

には必ず句稿を見せていた奥さん

を失われて、以前氏が奥さんを詠

まれた「漬物の茄子の色にも妻の

自負」「欲もなく夫の愛を信じ切

り」などの句に更に深い感慨と哀

惜を感んで居られる。

▼函館川

柳社主催の川柳展覧会が十月二十

一日から三日間開催されたが、路

郎主幹の川柳手拭、短冊その他の

作品も展覧され極めて盛会であっ

たと。

▼小浜牧人氏(西宮市)

は舞子病院に入院後、専心療養に

尽されているが、体重もはや三疋

増え、好調で、一月十五日には満

秋・薫風子氏らの見舞を受けられ

た由。

▼金井文秋氏(大阪市)の長女和

代さん二十三才は東住吉区湯里町

の大江勝次氏二十六才と一月二十

五日めでたく結婚された。

▼中

島生々庵家(堺市)に一月十三日

令孫佐和子さんがお出来になっ

た。お芽出度う。

▼木山遠二氏

(等岡市)の長男英詞氏は一月六

日死去、葬儀は川柳並木会並に多

数の文化団体の会葬で盛大に営ま

れた。哀悼。

▼真鍋一瓢氏(大

阪市)の母堂が一月十一日郷里岡

山県で永眠された。享年八十六才

謹んでお悔み申上げる。

転居

▼福富雷童氏(川崎市)は川崎市

片平寺台二三四三へ転居された。

▼吉本善風氏(尼崎市)は尼崎市

今北字三十六八番地佐山千鶴子

方へ転居。

▼平田三郎氏(吹

田市)吹田市大字片山一〇二郵政

吹田片山第二宿舍二〇六へ転居。

▼片上光福氏は布施市民病院を退

院、郷里愛媛県越智郡大西町新町

片上盛敏方へ移られた。

住所改称

▼樋口舟遊氏(西宮市)の住所が

左記の通り改称になった。西宮市

鳴尾町一丁目百四十四番地。

正誤

▼前号三七ページ下段、川柳不朽

洞会名簿中、岡部三十郎とあるは

旧姓「平田」に復帰されていたれ

るので訂正する。

不朽洞

一月一日午後二時か

ら南区三休橋南詰中

会から

鳥小児科診療院楼上

で開催。この日議案なく、居蘇を

祝った後、出席者一同本芸隠し芸

などを続々披露、賑やかに意義あ

る新春顔合わせを終了、八時散会

した。出席者、路郎主幹・霞乃女

史以下生々庵・小石・榮・春葉・

古方・いわを・潮花・恒明・竹莊

・薫風子の諸氏。

☆新会員紹介

▼内海敬太(奈良市)正会員

☆退会一三夫氏推薦

は家事の都合により十一月限り

退会された(多)

飛・燕・往・来

★野尻南海氏(アールロウズバー)

より

お送り下さいました「句帖」十一

月十九日、丁度、月例会句会の前日

に入手致しましたので、早速句会

に持参、同人に分けました処、大

変嬉んで頂けました。ジェットで

飛べば、二日で行ける日本ではあ

りますが、在米四十年、或は五十

年と故郷の山を夢に見ながらまだ

一度も日本行きチャンスに恵まれ

ない人もいる社会では、どんな小

さなものでも日本の色、日本の匂

いのするものには、言い表わせな

い郷愁をさそわれる様でありま

す。小生も亦、その中の一人であ

りますが、……後略。

新刊紹介

▼近松淨瑠璃本奥書集成

本書は近松淨瑠璃本について、疑

問作や改題・増補本をふくめ、そ

の奥書の集成をしたもので、これ

によって近松淨瑠璃本の出版元を

概観し得られ斯界の研究家を裨益

する点が多いだろう。

▼昭和三十

五年三月二十日発行。大阪府文

芸懇話会発行。非売品。

金 泥 集

課 題「暖 房」

麻 生 葭 乃 選

暖房車外はみぞれが用捨なく 阿茶
暖房がきいて湿疹痒ゆくなり 同
眠ざとくも子が呼びとめた暖房車 同
暖房車遠距離乗ってねむくなり 同
八階の朝へスチームまだきかず 若菜
暖房が切れて夜汽車ののろのろと 同
町議まとまらずスチーブへ水を注ぎ 同
暖房の部屋から雪の美しさきさ子
暖房を効かせアイスクリーム売れ 同
暖房のとはしき部屋に書を励み 奈良子
暖房は名のみなりけり三流館 同
我家の暖房豆炭まだ続き美喜
暖房で能率あげて呉れと云う 同
暖房をつけて常連席あけず 酔夢
暖房完備たった一軒パチンコ屋 同
暖房の部屋俵せな針仕事 たつよ
暖房のくらしの家で風邪薬とも子
暖房で毛糸編みする閑な女医 徳子
暖房について手袋を忘れて出 周市
飛び込んで来て暖房へぬきはじめ 梨花
暖房が眠りを誘う会議室 美音子
劇場の暖房コート持て余し 一栄
網棚の蟹が気になる暖房車 葭乃
暖房の病室外はもう若芽 同

次回題「机」切二月末日

★ ★
吉川英治氏と
川柳

長谷川三司

文化勲章を貰われた四人の中に、サンマの詩で有名な佐藤春夫氏と大衆作家の吉川英治氏の二人の文学畑が居られるのも嬉しい事だが、その英治氏が昔雉子郎の名で川柳を作って居られたことは、古い川柳家の中では衆知のことでも、川柳から文壇に出られたのも、川柳家川上三太郎氏の激励に依るものと聞いて居る。ところがその後文壇に名を得てからの英治氏は、昔の川柳を忘れたのか門外漢の如く俳句の話しはよくするが、川柳の事については何故か余り話したがらない様に見えうけれ、川柳家だけの話しになって居たが文化勲章授彰後のテレビ対談で、吉川英治氏の過去に触れた色々な人々の登場となり、その中に三太郎氏の顔が見えおやと思つて居ると、昔話に川柳の句を話したり英治氏の作句時代の句で「川柳吉原集？」とかの持主が（四国から若い人だったか）あらわれたり、ただ一瞬ではあったが吉川英治氏と川柳のつながりをテレビが見せて呉れて大変面白かった。これなども英治氏の意志に依るものではない様で、テレビ放送編集部の企画に依るもので吉川英治氏の過去に川柳があった事を、川柳家以外にも知って居る人があつたことも大変愉快でもあった。ついでに雉子郎こと吉川英治氏の川柳一部を知らない人のために列べて見た。

たことも大変愉快でもあった。ついでに雉子郎こと吉川英治氏の川柳一部を知らない人のために列べて見た。

何尺の地に這い得るや五十

年

蜜月の枕に散れる桜貝

嬉しさに憂きに鬼灯ふく女

世の中におふくろ程なふし

あわせ

飛下りは俺の身体で俺が下

り

小鳥店買われ行くのと鳴き

交し

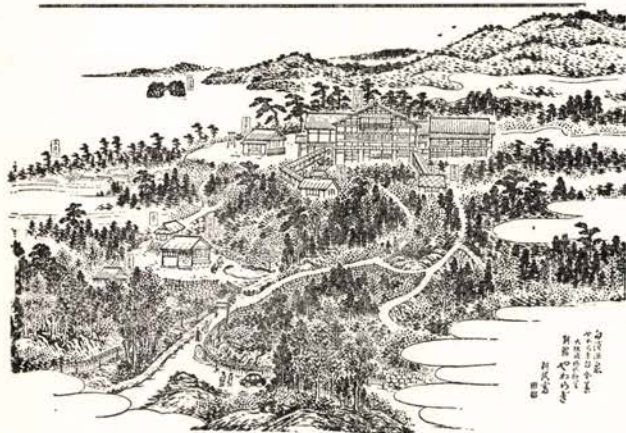
踊ってるのが知事さんで二

いようである。

雷は断りぬいて落っこちる

以上は明治大正頃の句で昭和になつてからの氏の川柳はあまりないようである。

白 浜 温 泉 の ど ま ん 中 や わ ら ぎ 台



万国観光旅館

や わ ら ぎ

北極星別館 12月22日開館
予約受付中 電話白浜温泉167番
お申込は大阪戎橋北極星へ電話641275-7

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原簿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 忘年句会 (大阪市)

12月18日 午後一時

会場——大成閣

新春句会より派手にやろうという申し
合わせもあって、豪華な賞品を川柳福引
きによって家庭サービスをする、よろこ
び倍増の忘年川柳大会である。

司会黒川紫香氏。挨拶松江海里氏は、
何よりも路郎先生のご健康をよろこばれ
そのお元氣倍増は柳界のためにも大きな
よろこびである。

久しぶりに演壇へ立たれた先生は、
「川柳塔で一句がつづいているときはそ
の作家に赤信号を出しているときである」
一句がつづくときは、平凡な句、また
は安易な句で作句しているその作家への
反省を求められていることなのだ。われ
われ作家には、これは重大なる警鐘だと
おもふ。心すべしである。

名物支部対抗戦で第二回戦に勝ち残り
た人々、阿茶・柳志・満秋・舟遊の四氏
となり、優勝戦では阿茶・舟遊両氏の二
騎打ちとなる。なんといっても一分回で
作るインスタント川柳であるから、よは

どの人でないかと勝ち抜けない。

行司土井文蝶氏が最後にあげた軍配は
その勝ち名乗りは、杏林川柳会のボー
山川阿茶さんであった。

川柳雪月花戦は花組の優勝となり、ピ
ンク・リボンに柳神がはえむ。

十一月の不朽洞賞は傍島静馬氏が(前
号発表)獲得。閉会後同会場で忘年会が
開かれ、去る年への反省、来る年への希
望を胸に乾杯。

(F)

出席者——路郎・庸佑・いさむ・紫香・
水客・好郎・圭井堂・満秋・舟遊・晃・
す・む・多久志・文秋・笛生・万葉・白
溪子・狂二・弦月・没食子・文蝶・古方
・敬太・繁雄・白柳・族風・紡毛・敬也
・芳川・湖花・柳宏子・阿茶・蛙木・句
念坊・三司・八郎・柳志・梅里・一瓢・
正一・たねお・榮・万的・生々庵・清人
・生屋・高史・草々・一栄・清子・一三
夫・東天紅・静馬・春葉・薫風子・雄声
・南宗・大丘子・メ女・梅志・亜純・奈
良子・愛二・宏子・豊乃

兼題「議員」 麻生路郎選

妻子まで忘れ議員になりたがり 白柳
やじ飛ばすだけの役目の菊バツジ どんたく
ご苦労と言え議員をまだ知らず 花宵
赤坂で与党の議員だけがもて 阿茶
此処は泣き落しでいにかと議員 晃
議員章殺られる程の顔でなし 水客
タバコ屋をやつて市会議員也 梅志
村会議員今日は朝から野良仕事 庸佑
入れただけは稼ぐつもりで議員 柳志
落選へ師走の風のきついこと 圭井堂
愛犬も新聞僚へ添えて撮る 敬也

ご主人が議員やさかいそりかえり

先生と呼ばれ議員のはしにいる
主婦連に名が売れている議員
ギブアンドテイクで議員になるつもり
当選をする迄守る低姿勢
選挙ではしゃべり議会で眠り
名刺にはいついまでも元議員
激石も子規も知らずに議員章
大物になった証拠に失言し
前議員目無し達磨に振い立ち
議員章それが千万円に見え
声なき声はてんとわからぬ議員
汚職議員またぬけぬけと出馬せり
私の選んだ議員眠っている

兼題「才能」 中島生々庵選

才能を鼻にもかけず能く泳ぎ 繁太郎
才能はパチンコだり知恵を出し 蛙木
褒めたさを秘くし才能叱る父 八九寸
飛び抜けた才能もなく東大出 文秋
才能があるで仕事を交えたがり 雄声
履歴書にみせる才能そりかえり 芳川
才能があつて結論言い切らず 旗風
下手から出て才能が釘をさし 舟遊
才能がやたら故郷を捨てたがり いさむ
才能を信じおだてにのつておき 白柳
才能の切り売りタレント馳けぬり どんたく
才能が女難の相に邪魔をされ 繁雄
虚栄心子の才能は下まわり 阿茶
世渡りの才能だけは別らしい 生益
平社員で過ごす才なら持ち合わせ 万的
才能をあたら酒乱がつまますかせ 一鶴
起死回生の策へ才能有りつたけ 六童子
才能の良き八方に敵を持ち 弦月
才能があると解らぬ絵をはめる 敬太

余技という方の才能認められ

才能がやたらに人をこき使ひ 東天紅
母ふつと子の才能がこわくなり 潮花
今に見ておれと才能唇をかみ 六童子
才能を過信していた左前 杏林
才能を標語募集に認められ 万葉
才能は連れ子の方にある不幸 白溪子
金にならぬ才能妻はこきおろし 春葉
才能がないなとおもう原稿紙 梅志
才能をおしなれておもう刑事室 敬也
才能がこの庖丁に生きて 旗風
才能を埋れ木にするへそ曲り 狂二
才能を伸すお金がかかり過ぎ 祥男
才能をかくし飯場のめしに馴れ 万葉
選外という文才をまだ捨てず 一三夫
才能はあつてもお金にはならぬ 祥男
才能のないのが父の職を継ぎ 杏林
才たけた妻に少々くたびれる 敬也
何してもこの才能が邪魔になり 生々庵

兼題「祝儀」 市場没食子選

地車に出した祝儀で村八分 八郎
ご祝儀と獅子舞囃みへようと言ひ 弘村
お祝儀の盃妻も小そう受け 祥男
祝儀袋満員御礼の札が派手 六童子
お祝儀へせてめでたない紙幣 山椒坊
ご祝儀の高を両家が打合せ 八九寸
御祝儀の高には触れず出る初荷 潮花
ぼち袋なでておじぎの角度変え どんたく
祝儀袋期待した程入ってず 庸佑
ご祝儀の酒顔へ出て喜ばれ 春葉
御祝儀でんがと引きさの旨いこと 栗
御祝儀と書きナツク義理果す 多久志
御祝儀の袋がいやに大きすぎ 清子
祝儀だけ取ればサツサと引き下り 弦月

ご祝儀が出てから三昧が一つ増え 東天紅
 祝儀全所呉れる人はもておく 梅里
 やるといふご祝儀だから貰ったとき 南宗
 お祝儀は頂きません主義の店 文蝶
 合せ紙祝儀袋も付けて売れ 文秋
 ご祝儀と下手な長唄聞かされる 庸佑
 千円の祝儀お腰の辺を撫ぜ 日満
 使うだけ使って祝儀出ししがり 弦月
 つりはつり祝儀は祝儀酔い乍ら 圭井堂
 御祝儀を包む佳き日のいい陽さし 紫香
 舞妓さん祝儀袋をのぞかして 大丘子
 縁起棚御祝儀袋は拝まれる 蛙太
 こいさんの嫁く日丁稚にも祝儀 清人
 御祝儀へ下戸も金持たされる 一栄
 おころしという祝儀が高うつき すゝむ
 祝儀だと大工の卵のまされる 敬太
 釣銭は貰うて祝儀ははずんどき 白溪子
 御祝儀のするめがつまる乱杭歯 文蠅
 お祝儀を顔より高う礼を言い 生蠅
 ご多忙にまだもたれてる祝儀 芳川
 下足番も祝儀わたった腰になり 好郎
 御祝儀へ儀礼をこえた金の嵩 雄馬
 妻と来た旅の御祝儀けちになり 静馬
 つけといて祝儀も一緒ににつにされ 繁雄
 ご祝儀も忘れて世話のやける客 梅志
 お祝儀もくれずぬけぬけ手 一三夫
 御祝儀と書くのに夫婦ゆすり合 阿茶
 何気なく祝儀は帯にはさまれる 夢虹
 御祝儀に御一統さんへ手をつのえ 梅里
 おきまりの嵩で祝儀を渡しとき いさむ
 御祝儀と両手に花の猪口を受け 梅里
 御祝儀という数の子のケチなかし 晃
 御祝儀の舞へ古老の脚たし 梅志
 ちり紙にくるんでむかついた祝儀 没食子
 目出度日祝儀も特にはずんどき 没食子

兼題「舌打ち」 若本多久志選

舌打ちはダイヤ通りに来ないバヌ 清人
 舌打ちへ姑は敏い耳を持ち 徹也
 舌打ちをよくする課長で気が疲れ 清子
 舌打ちをして警官の若い顔 水客
 舌打ちの癖が社長の前へ出る 柳宏子
 儲かりまへん顔で舌打ち儲ける 生々庵
 舌打ちの足を踏んだは美人なり 静馬
 舌打って師匠大げさに横をむき 紡毛
 舌打ちをして舌打ちをたしなめる 舟遊
 舌打ちをする靴が行く靴磨き 春果
 横向いている舌打ちはふてくされ 白溪子
 未練たらしく男舌打ちし 東天紅
 舌打ちにボリス愈々こて始め 圭井堂
 父ちゃんの舌打ち十目またとられ 七面山
 舌打ちをすれば親父の腫と出遭い 梅志
 テレビまた舌打ちをするコマーシャル 梅志
 舌打ちの癖が子供に皆うつり 圭井堂
 舌打ちを尻目に妻はサンマ焼く 三司
 狸寝が舌打ちをして向きをかえ 梅志
 舌打ちをしていいなりになる弱味 南宗
 舌打ちばかりして停年がもたら 万の
 アベツは舌打ち背へきき忘れ 阿茶
 舌打ちはまたフィルムを巻き忘れ 春果
 警官へ舌打ち残すハイデーン 笛生
 上綱は舌打ちをしてはめるもの 一瓢
 舌打ちを聞き咎められ舌打ちし 弘村
 強そうなので舌打ちもやめておき 日満
 打っ手な後手後手舌打ちの日が続く 六竜子
 吃音とも知らず舌打ちかと思ひ 雄声
 舌打ちのこで手を打つ腹を決め 文蝶
 一人前の舌打ちもする 園児 圭井堂
 舌打ちの喫うては捨てる待ち呆け 文蝶
 君にはない舌打ちを聞かされる 祥男

兼題「寝不足」 北川春果選

舌打ちをしても師走はままならず 没食子
 舌打ちが精一杯の平でいる 清子
 ゴミ箱へ舌打ちをした縄の帯 香林
 舌打ちへ役所は昼食の笑い声 清人
 舌打ちの馬券は暮れの風に舞い 三司
 舌打ちをして困交の負けを知り 多久志

寝不足の日に腕時計まで止り 芳川
 寝不足が続く夫婦に目出度い日 水客
 寝不足だすヒスデリーでないつもり 生々庵
 寝不足も苦にならぬ程ようはやり 柳宏子
 寝不足を同じデスクにひやかされ 圭井堂
 寝不足の顔で師走をよく稼ぎ 一三天
 十二月寝不足かこつ電話口 春果
 寝不足のミスは帳簿が知って居り 清子
 人のせいというに寝不足言うて居る すゝむ
 徹夜した大工の釘が曲がるなり 白柳
 寝不足を取り返したい寝台車 句念坊
 寝不足へ靴は昨夜のままよこれ 万の
 寝不足にマーシャンつきが回って来 静馬
 寝不足のわけは聞かずに茶を出し 文蠅
 寝不足の顔へ真直ぐ陽が当たり いさむ
 寝不足の手元あやしい靴すべり 柳志
 寝不足のままバッチョへ意地があり 万の
 寝不足になって年末らしくなり 柳宏子
 寝不足の交替になる生欠伸 阿茶
 寝不足の大作へ飲まず開店日 白柳
 寝不足をつけこむ三昧げいこ 正一
 マスコミは寝不足へ容赦せず 一三天
 寝不足へ予算超過を集めに来 万の
 寝不足の古味啗汁でやけどした 春果

兼題「どたんば」 松江梅里選

どたんばでオトイロという手をつか 東天紅

本社 天位受賞者 (35年度)
 句会
 ① 一三天 阿茶 ④ 牧人・梅志・三司・
 ③ 夢虹・梅里・徹也 ② 清風・潮花・南
 宗・いさを・晃・静馬 万案・① 翠・水
 断・与呂志・好郎・和楽・良子・奈良
 子・紫香・狂二・すゝむ・柳志・多久
 志・舟遊・淡舟・正一・保美・日満・
 水客・敏明・旅風・文秋・井平・梨花
 ・高史・庸佑・満秋・玲人・柳宏子・
 春果・恒明・どんたく・史風・新子・
 美恵子・亜鈍・いさむ・堰子・生蠅・
 春渉・薫風子・文蝶・紡毛

どたんばになるまで妻に黙つとき 一栄
 どたんばに來ればさすがに女なり 春果
 なるようになれたどたんばの高いびき 圭井堂
 どたんばにあつた無口のこいひと 春果
 どたんばへひそかに睡眠薬を持ち 一瓢
 どたんばへ女の知恵が恐ろしい 紫香
 えびがにのどたんば赤いつめを振り 万の
 どたんばへ来て電話をしまりつけ 芳川
 どたんばで逆に落付く土性骨 句念坊
 どたんばに高利貸等と言うとれず 圭井堂
 どたんばへきてアトクシンがきいてきた 古方
 どたんばになつて代書の知恵を借り 古方
 どたんばではかに子供があると言ひ 生蠅
 どたんばになつて不渡りだとわたり 春果
 どたんばの肘鉄砲はよくこたえ 多久志
 どたんばがここにあらった月初め 白柳
 どたんばがすむにどたんばは来させ 一瓢
 どたんばに來ても動ぜぬ黙舌権 圭井堂
 どたんばのなんのとどたんばの深呼吸 古方
 どたんばになつて鶏屋根へ飛び 舟遊
 どたんばは死を決しての知恵もなく 笛生

どたんばに毒婦が抜いたい咳呵 三司
どたんばでどうにもなる鳩ボツボ 芳川
どたんばで拝む心を教えられ 生々庵
どたんばへ妻は一本つけてくれ 好郎
どたんばへ来て走る賃に出来 水客
どたんばは強い男にしてくる 館生
どたんばで私にや夫ありますの 多久志
どたんばの妻の度胸に支えられ 圭井堂
どたんばへ追いつめられた櫓が落ち 三司
どたんばで逃げる男の底が知れ 梅里

席題「オーバー」 丸尾潮花選

オーバーをぬいでゆつくりしていく気 失名
オーバーもぬがずストを指導する 春葉
初めてのボーナスで着るオーバー 清子
オーバーも年輪を入れた裏がえし 生薑
荒れた手で妻オーバーを着せてくれ 牧月
オーバーのままお座敷まで通り 白溪子
色褪せたオーバー丸く切符売る 柳宏子
オーバーをぬげばボーリッな男 清子
オーバーを着たまふと顔を出し 晃
言う事がある権藤で脱ぐオーバー 一瓢
親しさは旅でオーバーの同じ柄 雄声
ウインドに池田景気を見るオーバー 草々
オーバーを形にとられた朝戻り 狂二
手ざわりは買えぬとめたオーバー 柳志
オーバーに親父の方が若返り 圭井堂
オーバーを着ると女給も普通の娘 清人
オーバーが重く感じる年になり 舟遊
オーバーをどこで脱いだか覚えてす 圭井堂
その儘でそのままでオーバーがさす 生薑
オーバーの下はボタンもない背広 一瓢
オーバーを脱いで夜警の無事な朝 いさむ
オーバーへ師走の風が押し来る 芳川
オーバーに熱の子包み医者たぐ 一三夫

オーバーを脱ぐ間おどろき繰り返えし 本客
オーバーを着せ商談のあった世辞 紡毛
プロにはオーバーも新巻の色 潮花

雪月花戦「尻もち」清水白柳選

尻もちをついて一円玉拾い 句念坊
尻もちをつかず廊下の磨きよう すむ
スキーリフトから尻もち見下され 万的
尻もちを互いに笑うスキー場 正一
尻もちの跡を眺めてみる 若さ 旅風
尻もちをついた子へ夫婦して走り 晃
尻もちをついて男のお手を借り 東天紅
どくしように尻もちをつく 聖満型 文秋
尻もちを子に起される船になり 白溪子
尻もちも不慮に見える大男 柳宏子
神業のように尻もちサツと起き 雄声
尻もちのお膳しつかり持つている 薫風子
尻もちへ不運な蛙ふまれたり 敬也
尻もちを言て見ぬ振りの雨上り 圭井堂
尻もちをついた女のみだしなみ いさむ
しり餅をつかれてどうしようあわたり 多久志
尻もちの愉快味知るスキー場 たねお
尻もちをついての方がおかしい 紫香
尻もちを大きくついで子に負ける 舟遊
尻もちを連れて帰って裸にし 文蝶
綱引きの尻餅勝った方がつき 白柳

(庸佑・清記)

淀川支部句会 (大阪市)

中年になってサロンの味覚え 東洋男
灯を一つ残して残業の子を案じ 六竜子
残業のひかりへストロブやは燃え さきす
この度は忘れる事で叱言切れ 礼司
親の恩忘れ都会でする 苦勞 水堂

祝盆と共に公約忘れられ 花村
留守宅の妻へ毎晩電話掛け 句念坊
留守宅の二階の窓から煙が出 幽谷
留守宅は酒の用意に立ち上り 若菜
留守宅をばあや一人の日向ほこ 一鶴
留守宅は一縷の望みすてていず 香林

玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

アングレート勇気を出して書てやり 白柳
満身の勇気ふるって恋を告げ 一栄
勇気もていざ乗り込まん満員車 守信
空箱を踏台にして一つぶち 句念坊
何かまに合いうで空箱ためておき 文秋
空箱のように蹴られた己が過去 正一
ヤクソクの様にバンドもフィナーレ 六竜子
フィナーレ猪定九郎も総踊り 曜子
フィナーレあとは慌てる終電車 清
フィナーレのあとを追いつくはかりなり 柳宏子

阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

目出度い日ネコにも少し小豆飯 葉光
失職へ赤飯炊ける日がめぐり 清人
赤飯をお茶漬にする翌る朝 唯義
借りるだけ借ってドロンと決める腹 生薑
借りのある手前何んとも言うわ 庸佑
借りている方が気楽に腹を越し 豆秋
仲たがいの心の借りが気にかかり すむ
予約とる春の見本の旅袍 曜子
零用気でセールスうまうまといふ 光福
セールスマン妻の嫉妬に気がつかれ 一三夫
咄弁に涙も入ってかきくどき 鎮海
まま母の悲しさ嫌味にみなとられ 山椒坊
真心はわかるが金の方を取り 文秋

もみ合った末真心が判りだし 梅志
涙一貫真心だけが取得なり 奈良子
真心をわかってもらう金が要り 晃
たすきはすして真心の札を言う 白柳

にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

コーヒーを日に三度飲む夜の顔 薫風子
キャバレーの灯に美しい顔を持ち 満秋
救急車ダイナミックに走り抜け 清人
足の傷癒えたらうれしさ子が走り 竜昭
はるか来いで湯の駅の霧に佇ち すむ
二号とは知らず故郷では甲斐性も 生薑
甲斐性のないおつとんがしうひけ 慎太郎
甲斐性があるって恨など気にかけず 白柳
産むのを産まして宅の甲斐性なし 六竜子
千円を押し戴いて甲斐性なし 牧人
甲斐性なし大きな声で子を叱り 晃
血圧を気にする医者少くし欲め 舟遊
皆んな手がはなれ血圧ドック入り さかえ
血圧を案じるほどに暇が出来 旅風
嫌な音となりが廻す洗濯機 柳志
餌を食べる音すさまじい鳩の群 文秋
黒い大きな車輪が生きる音を立て 敬太
かしわ手の音から我が家朝になり 連
子供部屋音がせぬから気にかかり 唯義
音立てて吾が哲学の崩るる日 葉平
音のする方へ赤ン坊目動き 満潮
心耳を澄ますときわやかな音 梅志

ハワイ支部句会 (ハワイ)

若夫婦の内緒話はひがんで見 風草
頑固さが店の看板変えさせず いつ生
良縁を明治の頑固が邪魔をする 快夢起

ライバルへ内緒で棋譜を調べる
内緒では云えず飲んで寝てしまふ
頑固さはまだ隠退へ踏み切れず
下積は頑固の故と気がつかず
娘に家出されて頑固が慌てだし
これしきと思ふと母の内緒金
内緒で買ったドレスを持て余し
監督の頑固経験だけを云い
頑固さは明治の殻を脱け切れず
内緒です云わぬが花のプレゼント
頑固者切れば血泣けば涙出し
頑固者逆らわぬ子が怖くなり
頑固者隣り合せて睨み合い
ご隠居の頑固は今年とらず
あと口の悪い頑固へ寝そびれる
内緒とは知らずフェイスで礼を云い
何時までも内緒で居れぬ腹となり
年金の余生へ頑固まだ続き
頑固者近道などに目もくれず

浅太 銀水 麿花麗 柳葉 押山 内海 須磨子 芥平 玉屋 旋風 青風 エス子 紅溪 泉水 平八郎 紅茶 暁舟 弦月

川維 京都支部句会 (京都市)

導火線つくってあとは第三者
麦飯は二度と云うまいから落ちる
導火線山が崩れろが己りや知らん
微光という世界にアンマ歩いてる
遭難の夜空に星の微光追う
女房中年となり閉口の日々である
洋式のトイレ閉口してさがり
水切った鋸の背がつかはなす
丸鋸が木曾節を聞く朝のとうつこ
借りて来た鋸でいきなり釘を挽き
年老いた愛称をくれるなり
グルーブが寄れば愛称死んでいる

田中鳥雀選 つる子 禎一 鳥雀 豊次 千潮 礫 生薑 紫蘭 ゆきさら 和三郎 司郎 晴芽

川維 浜寺支部句会 (堺市)

川村好郎報



有頂天なのが先棒かついでい 東天紅
有頂天になった若さの妻と老け 生々庵
有頂天最後は戻ると妻信じ 好郎
有頂天発車ベルにも気がつかず 雄声
有頂天鋸ちゃんこつち向いただけ 狂二
予想通り又も女の子が生まれ 小石
逆も又真の予想が図に当り 裕邦
予想ですがと流言まき散らし 圭木
新婚を訪えば予想と違ふ顔 圭井堂
他愛ない予想に心動かされ 左久良
扶養家族まぶたに浮ぶ低姿勢 末一
新店が出来て老舗の低姿勢 白柳
菊一輪生けても腕の上手下手 広天郎
予想通りまた脱線かお茶が冷え 文蝶

川維 広島支部句会 (広島県)

平田越舟報

環境が女の理性失わせ 日進
足どりもかるい株屋の好景気 てるじ
どたんばで女の度胸に教えられ 自然
三人目も女が先が恐くなり 美文
イヤリング派手に秘密を女持ち 上利
火葬場もう煙かと振り返えり 昌幸
ふりかへるババへ見送る手が答え 二三六
気まぐれを所詮は女忘れかね 越舟

川維 米子支部句会 (米子市)

小西雄々選

忘れずに人は三度のめしを食べ 満秋
人の価値凡人金で秤るなり 舟遊
暗闇に來ると人間まで変わり 雄々
人間の哀れき唄う名調子 吾柳
弁護士に見はなされてる人もある 秋人
悪人はこの世にないと思ふ 節枝
道歩く人見て暮れる小商売 一机
人間の持味笑う皺になり 芋人
人の世話やいて自分も貧しすぎ 翠月
怒ること知らない人で底が無し 三舟
人間の条件派手になるばかり ユリ子
この人も金をもたせば愚かなり 薫風子
打水へ水道使つて叱られる 弦月
山合いのこゝまで家が建つ整地 すゝむ
家中の玩具にされて子が育ち 一步
家柄で食えず娘の紅を塗り 無閑
金金の世界人道ふみはずし 幸子

川維 西宮支部句会 (西宮市)

若本多久志報

靴音へ疲れを乗せてババ帰り 和三郎
一本を円で買う白髪抜き 啓子
漸くに疲れが見えてスト妥結 すゝむ
お母ちゃん苦勞したと抜く白髪 大丘子
道順の地図は自宅を大きくし 民子
交番で聞けばすすめた地図を出し 泰
旅仕度昔の地図で用が足り 蘇堂
智恵の輪を抜いて気短とも見え 舟遊
今日明日が勝負疲れを云うとれず 牧人
親に似た物腰になり障子張る 一十
地図だけが知っている 栗あつめ 輝雄
広告のつもり赤字も目をつむり 弦月
広告のネオンが一村消えたまま 三司

ドラマかと思つたほどのコーシヤル
寒いほを出して抜き給かしこまり
ポストまで書いて榮転知らせて米
いつ来ても障子がきれいな老夫婦 青風

川維 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

中年の恋は田を売り山も売り 多津男
夢が空廻い 中年の平社員 孝風
中年のミリヤはネーと紛らかし みのる
角力取り早や 中年の廿七 凡石
中年が勝つて青年口惜しがり 凡志
派手過ぎしやないかと中年これに決め 左文字
中年のぐちは政治に向けられる 越山
中年へ嫁ぐアブレをもて余し 万世
中年の恋魔がさした魔がさした みのる
中年の抜け毛は補充して呉れず ひか平

川維 木次支部句会 (鳥根県)

藤井明朗報

礼束の悲哀人生狂わせる 二三子
来年へあと数分の湯に浸り 泉人
思い出は影の太さがあるばかり 一柳子
礼束に物を言わせて 大普請 明暗
二次会のいつか女の膝枕 栄治
礼束が舞つて球界話題まき 佳仙
思い出の宿に社用の旅装解く 古坊
思い出が時計の刻む音に消え 清泉
礼束は人ごとわれに縁がなし 老民
二次会のお帰館妻は背を向け 鶏声
思い出を感傷にする秋の雨 明朗

杏林川柳会 (大阪府)

つよりを言つて寝られぬ夜が続き 一哲

つよがりはおよしなきときせかける
生々庵
きこえない方へ耳うち勘を立て
小石
耳うちで指さす程の妓でもなし
野迷路
耳うちで背中叩いて念をおし
阿茶
耳うちをされて途端に低姿勢
一伸
老人と火鉢は隅に置き忘れ
珊瑚枝郎
せめてもの人の来ぬまの股火鉢
太希志

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

その筋もイブのトイトへ粋を見せ
没食子
バツカスの外に神なきクリスマス
露児
来る事を意識して持つ薄化粧
春雄
悲しみの喪服はルージュ薄くひき
草右
世渡りが上手か隣り低姿勢
竹青
勝手からあがる親類恩があり
風船堂
口先の低姿勢ではついてこず
幸男
クリスマスパーティー券に苦しむ妓
宏子
クリスマスパーティーと云う顔で来る
愛論
就職がきまつて朝の薄化粧
正徳
薄化粧するだけにまだ魅力あり
康彦
低姿勢野心の幕がすけて見え
けい女
金の入る時だけ妻は低姿勢
竹志
何かあるなと思わせる低姿勢
竹莊
話せると孫に云われて得意がり
洋子
低姿勢バツチを付けてどこへ
よしを
低姿勢見ている方が歯がゆがり
春葉
低姿勢オヤオヤ君も養子だな
路郎

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭本報

解散退場影の薄いのも混り
鳥莊
女大臣解散までの人気とり
みなつき
次の手を考えながら解散し
圭本

解散で地位心配な自己批判
句念坊
剰余金飲んで解散すると決め
圭本
職責へ今日も無事故を祈って出
宏子
怨のなきこれが無事故をつづかせ
圭本
事故なし事故なして晩酌へ座なり
路郎

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好祐報

子煩悩今日もカレーに押切られ
晴暉
急所をばそれでおつたで助かつた
雄木
あんなの手急所々々がよくこたえ
柳彰
署長より急所を指摘された汗
風柳
論告は急所をついて静かなり
好祐
咳一咳急所を外すお茶を飲み
京一樓
義理人情忘れて何が権利義務
九紫
靴みがくビルの谷間にある権利
雅堂

明和研究会 (西宮市)

樋口舟遊報

北極点風は静かに吹いている
三舟
風たちし庭にショパンの曲を
舟遊
冬の野を風白骨の色で吹く
夢虹
つむじ風別れた人はもう見え
新子
四十過ぎようやく向い風となり
薫風子
地下鉄のさてどの階段を上ろうか
太路
無駄使い許さぬくらし恥多し
牧人
有名を意識しているせき払い
千尋
青空の高さ病院一つある
梅志
三十年の努力が実のり定年さ
すゝむ
因習の歴史そのまます古都は暮れ
弦月
実るのを待たずもぎとる青い柿
大丘子

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

寒中見舞

麻生路郎

弘川寺吟行
西行も知らずにおわす記念物
ともこ
天然記念物見ればなんでもい
柳太
山門の勸願床にかえりざき
周一

羽曳野句会 (羽曳野市)

川村好郎選

有頂天女将の意見だけ残り
泉洋
有頂天おごられたと気がつかず
有里
気がつけば足が出ていた有頂天
美子
有頂天紐付き女とつゆ知らず
一峯
パーマダム有頂天にしツタを出し
博導
大鵬のお髭触った有頂天
けんじ
有頂天あの人家まで無事かしら
茂雄
有頂天妻のハンドル気にかかる
志満
一等に走る我が子へ有頂天
なみ
有頂天なつたふりして手を握り
又二
有頂天特ダネ記者の第一報
仁一

野獣会第二回句会 (奈良市)

内海敬太報

遅刻する子の宿題は出来ていず
宇彦
宿題と言ってドリルを渡すとき
善介
宿題を出してあしたはストです
力
宿題の多い先生偉く見え
一邦
喧嘩して泣いてわめいて寝てしま
加代子
声だけは今にも喧嘩始めそう
峰木
先生も家に帰えれば好い親爺
正重
先生と呼ばれ背広が堅くなり
浩司
もう喧嘩すなど言わぬ仲間なり
佑人
宿題を忘れて無心に遊んでる
敬太
大根も良く太ってる桜島
栄作
喧嘩した後でれくさい仲直り
敬介

酌よし
千日前大劇裏
TEL 〇二七〇
味よし
アベノ橋近鉄地下
TEL 〇一四七

大萬

梅里の店
★大万川柳(第百二十回)を募る
兼題「女・優」 路郎先生選
締切・二月十五日 (五号以内)
発表・二月廿一日 (五号以内)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛

お芽出度う会 (一月一日)

新芽生ずるを望み、生々萬物に集つた人々、皆を大衆にたらしめ、風子・古方・春風・いわな・蓮花・福寿・新芽の諸氏等。



柳 樽 室

★新春を迎えて、多数の方々から賀状をいただいた。有難う。私は一月元旦から別人のようになり元気がなくなったので、ご放念を。★歳末の廿七日にハワイの前山北海君が前触れもなくやって来た。コレもジャーナリストらしくいい。「やあ、あがり給え」である。早速、通信病院の足立春雄医師へ電話した。春雄君が見えたので一盃を傾けながら談話した。★私等夫妻は夕刻から杏林川柳会の忘年句会へ出席しなければならぬので、生々庵医師へ電話し、北海君をゲストとして同伴することにした。句会後、北海君のインスタントカメラや平尾太希志医師の愛蔵の日舞などがあって十二時近くまで款を尽くした。(柳界展望欄のカメラ参照)

▼二月という月は、一

年三百六十五日のツジツマを合わせたためのような月であり、商売もなにかもズグツグたりという、月としては気の毒な月である。

▼本誌は執筆陣に恵まれ、この二月号にも原稿が次号回わしになったのが相当あり、ありがたや、ありがたやである。東野大八氏の玉稿が遅配で本号を飾れず残念であった。

▼一昨年小田火災の節不朽洞会の方々にお世話になったが、この二月から非才をかえりみずベン一本で食う決心をした。編集上に多少ともプラスになれば望外のよろこびである。

(一三才)

★二月句会——川維支部

★淀川句会・10日(金) 六時、題、有名・狂つてゐる・冬、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、★宇部句会・5日(日) 一時半、題、ガラス・徳用・堀・勧告所、沖ノ山厚生町一ノ三上杉青山居、★玉造句会・10日(金) 七時、題、抜打ち・文度・絵看板、所、市電玉居(董)

造南百米大阪信用金庫

★阿倍野句会・15日(水) 六時、題、早起デーマ・鳩、所、旭町二丁目金塚会館、★明和研究句会・12日(日) 一時、題、耳・針・主義、所、阪神鳴尾下車東南二百米鳴尾公民館

★京都句会・16日(木) 夕、題、漫ろ・出口・手酌、所、四条繩手伸源寺、★西宮句会・17日(金) 六時、題、鬼・肉・昔、所、阪神西宮駅北出口スグ市立労働会館、★かがみ句会・2日(木) 一時、題、体験・他人・原因・申込み・がめつい、所、池田古心居、★米子句会・12日(日) 一時、題、針・P.T.A・土曜所、米子市公会堂和室、★小松句会・12日(日) 七時、題、長靴・責任・刃物、所、日の出町日の出湯、★南海電鉄句会・23日(木) 六時、題、私鉄・立役者・盲点、所、難波高架下親和クラブ、★しなり句会・19日(日) 六時、題、首・人形・ほろよい、所、玉出新町通一の一一後藤梅志居(董)

ノイローゼをふっとばす

習慣性や副作用の心配がない 催眠鎮痛剤

プロパリン

(健保適用)

30錠 60円 100錠 150円・医家用には粉末 25g〜

日本新薬株式会社

プロパリンはもちろん催眠剤ですが、又一方に於ては大脳皮質性の緩和な鎮静剤としても大へん広い用途を持っています。

例えば……最近話題のトランキライザー的な使用法もその一つ……イライラ、ジリジリした時にいとも二三錠これで気分も落ち着いて夜も又安眠、という訳であまりクヨクヨせずに今晩はプロパリン錠で熟睡なさってください。

お待たせしました
最新刊の

東野大八著

風流 人間横丁

価二五〇円 送料 三三円

B 6型 二五八頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄しい。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。

★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

★送料金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇番をご利用が便利で安全です。
(切手代用可)

麻生路郎著

好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句

川柳の味わい方・五百数十句

価二五〇円 送料三三円

上質B 6版 二五〇余頁

大坂市住吉区西五丁目二五番地

川柳雑誌社

電話 大阪 七五〇五〇
電報 大阪 七五〇八一

若本多志著 麻生路郎序 好評噴々

川柳 親ごころ子心

価 150円
送料24円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樹の中から親ごころ子心を語った句を多年に亘って根気よく拾い集めたのが本書である。登録された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知らしめる。実に有意義な書である。

大坂市住吉区西五丁目二五番地

川柳雑誌社

電話 大阪 七五〇五〇

あなたの句帖が出来ました



★路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の基礎が出来ます。又柳友への贈答にも、句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊五五円(送料)
十冊五百円(送料)

大坂市住吉区西五丁目二五番地

川柳雑誌社

電話 大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

末座 (十頁以内) 市場没食子選

ブルジョア (十頁以内) 長野文庫選

移り気 (十頁以内) 菊田いさむ選

社用旗 (十頁以内) 川村好郎選

味方 (十頁以内) 河村日満選

ウインク (十頁以内) 森下愛論選

毎号募集

近作柳樹 (柳樹十句以内) 麻生路郎選

川柳塔 (柳樹十句以内) 北川春巢選

文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

▼投稿は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投稿が出来る。
▼「川柳塔」の投稿は不刊詞委員に限る。

川柳雑誌 第三十六号

（禁転載）

昭和三十六年 二月廿五日印刷
昭和三十六年 三月一日発行

大坂市住吉区西五丁目二五番地
行印刷人 麻生幸二郎

編集者 麻生幸二郎

大坂市住吉区西五丁目二五番地

川柳雑誌社

電話 大阪 七五〇五〇

printed in Japan

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位総合ビタミン・ミネラル剤

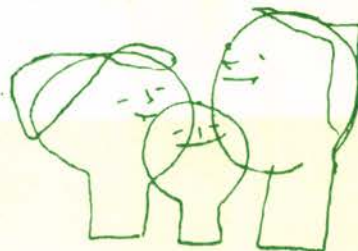
ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL ⑤551-2

麻生路郎先生著
川柳とは何か
―川柳の作り方と味い方―
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。
絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽―そうしたもの
もろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短
詩型、それは伝統的であると共に常に革新
的であるその川柳がいかんして発生し、経
過し、今日に至り、将来に動くか、しかも
その作り方は、味わい方は―以上を最も
明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる
著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

送価 二五〇円
三三〇円

至文堂

東京都新宿区払方町27 銀禧東京29507

- 肝臓機能増強
- 抱合解毒作用
- 有毒アミンとの抱合
- 結合組織の賦活
- ビタミンやホルモンの活性化…

〔適応症〕

黄疸、肝硬変、急性・慢性肝炎、
食中毒、薬物中毒、小児ストロフ
ルス、神経痛、ロイマチス、妊娠
悪阻、急性・慢性湿疹、蕁麻疹、
放射線宿酔、病中・病後の衰弱。

(25g ¥910, 100g ¥3100, 500g ¥12000)
(30錠, 100錠, 300錠, 1000錠, 注射液)

強肝・抱合解毒剤

グロンサン



中外製薬株式会社

〔文獻送呈〕 東京都中央区日本橋本町